化學戰の將來

光學兵器と化學兵器に就いても、各國共躍起となつて官民兩方面にその研究が進められつゝある。今この兩者に對して、簡單に意見を加へてみよう。

——光學兵器には、視力を補ふものと、測定のために用ひるものとの二種がある。物體を見たり、物體の距離を測定することは、日常の航海上にも、艦外との通信にも、是非とも望遠鏡や距離測定器の力を借りなければその圓滑は期し難く、戰時に於いては、大砲の射擊、魚雷の發射から、水上、水中、空中の見張等、いづれも双眼鏡、觀測鏡、距離測定器の力に依らぬものはなく、——潜水艦も若し潜望鏡がなかつたならば、その威力は半減否、それ以下に低下するであらう。かやうに觀て來れば、光學兵器の良否が海戰の勝敗を決する一つの重要要素であることは、疑ひを容れないところである。

彼の英獨海戰に於いて、ドイツ艦隊が常に卓越した射擊を行つたのは、觀測鏡が良かつたゝめである、と云ふ者もある位で、爾來各國は競つてドイツ光學兵器を研究し、殊にフランスの如きは三萬法の懸賞でドイツ式測距儀の考案を募集した程であつた。從來の光學兵器は、その悉くが可視光線を利用するものであつたが、今日では紫外線とか赤外線とかの不可視光線による祕密通信、暗夜、煙幕並に霧靄中の透視可能の光學兵器も漸次發明されつゝあり、實にこれ等光學兵器の發達は、航空機、潜水艦のそれと相並んで、大なる影響を戰術上にもたらしたのである。望遠鏡、觀測鏡、測距儀、對空測距儀、潜望鏡等にいたつては、近來長足の進歩を示し、大東亞戰下に於いてその卓超せる威力を遺憾なく發揮して居るのである。それ等の構造及び性能については、こゝには省略する。

化學兵器と云ふのは毒瓦斯、發煙劑、燒夷劑等を應用した兵器の總稱であるが、單に毒瓦斯を應用した兵器だけを化學兵器とも云はれて居る。その分類は區々であつて、國によつて異つてゐるが、その主なるものは、毒瓦斯及び發烟應用兵器である。その中毒瓦斯に就いては、防

空訓練の結果一般的にも普及されて居るから、――海軍に於ける發烟劑の應用に關して述べてみたいと思ふ。

發煙劑には燐、四鹽化錫、百鹽化チタニユーム、その他混合煙劑等がある。そしてこれ等は主として煙幕展張に用ひられ、又信號用に供せられることもある。この煙幕を展張する方法には色々あるが、發煙劑充塡彈の發射、發煙浮筐の投下、飛行機による放煙或は煙彈の落下等によつて展張することが出來る。

要するに煙幕は必要な時に、必要とする部分を遮蔽して、戰鬪を有利に導くために用ひられるもので、煙幕使用の二、三の場合を例示すれば左の通りである。

一、彼我の戰艦戰隊決戰の際、その中間適宜の海上に煙幕を展張し、敵の照準發射と彈著觀測とを不可能ならしめる。

一、敵の一艦を先づ擊沈する必要ある場合、その艦以外の敵艦を煙幕で包圍し、目指す一艦に砲火を集中して目的の達成に努める。

一、飛行機は先づ敵艦上に煙幕を展張して、航空機射擊砲の照準を不能ならしめたる後、低空より徐ろに爆彈を投下し、敵より射擊を受ける前に安全界までの退避を可能ならしめる。

一、水雷戰隊が敵艦隊を襲擊せんとする時、先づ煙幕で敵艦隊を包圍し、水雷戰隊はこの煙幕に隱れて敵に接近し、魚雷襲擊を決行すれば、その命中率を著しく高め得る。

一、運送船、給油船等は勿論、その他の艦船にあつても、潛水艦の攻擊に備ふるには、煙幕展張は最良の手段とせられてゐる。

一、上陸作戰に際し、上陸地點の海岸に煙幕を展張すれば、敵の射擊を受けることなく、軍隊を上陸せしめ得る。

そしてその煙は、次のやうな條件を備へなければならない。

――所謂重い煙であつて、安定的に長く空中に浮遊し得ること。

――遮蔽力の大なること、即ち出來得る限り薄層にて物を隱し得ること。

――適當なる色を有すること、煙幕用の煙は今日經驗上白色のものが重要視されてゐる。

さて、開戰前までの各國の化學戰準備はどうであつたか。歐米各國のそれに對する方針は略

ぼ共通であつて、平時これが準備に對する基礎の諸研究は官省にて行はれ民間化學工業の發達と相まつてこれが連繫を確保し、且つ化學戰に對する一般常識を普及し、尙ほ毒瓦斯その他の化學兵器の平時用途を奬勵して、國家の全能を有利に利用せんとして居たのである。各國のその施設を概說すれば、列國を通じていづれも官公の施設として化學兵器の研究、運用、補給、教育等を統制するため、平素から化學戰部を設けて、前記の諸機關を附屬せしめて化學戰準備の發展を期して居たのである。これ等の機關が最も完備してゐたのはアメリカで、ソ聯及びイギリスがこれに次ぎ、その他の各國も趣旨に於いては大體これに準ずる制度を採つてゐたやうである。——要するに、化學戰の歷史と發達を知つて、その將來を觀察するならば何人も「それが現在及び將來の戰爭に重大なる影響を與ふること」を——、最も明瞭卒直に肯定するだらうと思ふ。

以下、今次歐洲大戰に登場した新兵器の中、新聞雜誌に現はれたものゝ二、三に付いて筆を進めてみよう。

先づドイツの長距離砲であるが、その口徑は大體二十八糎程度らしく、彈丸の屆くのが二百

五十キロで、前大戰の際ドイツが戰線を越えて遙かパリーを攻擊したと云はれるペルタ砲の最大射程が百二十キロと云はれるから、今度のものは、實にその二倍も飛ぶことになる。二百五十キロと云へば、東京——濱松間の距離である。フランスのカレーから、ドーバー海峽を越えてロンドンまで百六十キロ、オランダのオステンドからロンドンまで二百三十キロであるから、いづれもドイツの占領下にあるこの大陸より容易に、ロンドンを攻擊出來るわけである。この彈丸の飛ぶ最も高いところは、六十キロと云はれるから、實に富士山の十六倍といふ高さを飛ぶことになる。所謂成層圈を飛ぶのであつて、彈丸の受ける抵抗が少く、非常に遠距離に屆くことになるわけである。參考までに書くが、從來列國の海軍砲の彈丸の飛ぶ一番高いところは、富士山の大約二倍位の高さである。この長距離砲は、距離は遠く飛ぶが相當無理な計畫をしてあるので、砲身が長く使へないことゝ、精度が良くないと云ふことが缺點である。

次に目につくのは、高速魚雷艇である。各國ともこの種のものは隨分以前から研究はして居たが、今次大戰でドイツのものが、ドーバー海峽邊りで旺んに活動をして居る。これは、その名のように非常に速力が早く約四、五十節と言はれて居る。發射管を二基位裝備して、これに

魚雷を抱いて、極めて小人數で敵の輸送船などに驀進、近迫して、魚雷を發射するのである。しかしこれは、常に波浪の荒いところでは使用出來ない。

爆彈に付いては、色々と新傾向のものが現はれてゐるが、その中の——高勢爆彈は非常に威力の強い爆彈で、ドイツがマヂノ線を突破する時に又、ロンドンの爆擊に使つて居り、非常に効果が大きいと言はれて居る。その他、發聲爆彈、燒夷爆彈とドイツが色々と知能の限りを盡して、イギリスの攻擊に使用して居るやうである。

イギリスは、燒夷カードと云つて、大きさ五糎四方位のものでこれを空中から散布し、落ちて乾燥すれば自然發火して、約二十糎位の焰をあげて燃燒し、主として穀物、森林、家屋等を燒き拂ふ目的に使用されて居る。飛行機一臺で二十五萬枚位運ぶことが出來ると云はれるから、その威力は相當なものである。

イギリスは亦、ドイツの空襲に對して、防空阻塞氣球、浮流空雷及び鋼線彈丸等の防禦兵器をも考案して居る。阻塞氣球はアドバルーンのやうなものを、鋼索線で繫留して、敵機を引つ掛けようと云ふもので、ドイツがロンドン爆擊をやる際に、先づ高速力の戰鬪機を出して機銃

でこの阻塞氣球を打ち落し、それから爆擊機が進んで行つたと云ふことが、屢々報道されて居るのである。浮遊空雷はこれ亦、氣球に機雷を附けて高く揭げ、敵機が引つ掛つたら、爆發して敵機を落さうと云ふ仕掛けのものである。

鋼線彈丸は、高角砲の彈丸の榴散彈の代りに、鋼線を螺旋狀に捲いたものを入れ、大砲で打出して、敵飛行機の前方に開かし、からみ落さうと云ふ仕掛けのものである。

ドイツの考案で、仲々良いと思はれたのは——探照燈で敵を照すと、「その光芒の中に觸れた敵機は全く操縱の自由が失はれる」と云はれ、オランダの海岸で實驗されて良結果を得たと新聞は報じて居た。しかしその後ドイツが小規模ながら、イギリス空軍の爆擊を受けたところを見ると、未だこんな調法な兵器は十分完成されて居ないことを證明するものと思ふ。その他、火焰放射器、藥煙幕、遲發性爆彈、火焰放射投下爆彈、空中魚雷、磁氣機雷等が登場してゐるようであるが、その詳細は尙ほ不明であるので省略することゝする。

海上作戦の變貌

平面戦から立體戦へ

今度の大東亞戦は、雄渾豪壯なる大構想の下に行はれてゐる世界無比の大戦であることは、今更云ふまでもあるまい。この意義ある大戦爭に於ける——近代海戦の特徴を要約してみると——、

「作戦地域の廣汎なること、近代的立體戦の花形なること、制海、制空は一體なること、陸戦隊作戦の特異性」

等が擧げられるのである。戦場の廣大なる點では、日露戦爭の日本海々戦も——古今東西の海戦史で特例の一つとして數へられて居たが、今次の大海洋作戦は、開戦劈頭に於けるハワイ

海戦、マレー沖海戦を始めとし、その戦闘水域は太平洋から印度洋へと擴大し、殊にわが海軍航空機と潜水艦は東西一萬浬に亘る大空や水中を縱横無盡に活躍してゐるのである。前歐洲大戦の時でもその戦場は、世界の各水域に亘つては居たけれど、一國の海軍が單獨で今次の戦爭で日本海軍が敢行して居るやうな廣汎なる海上の作戦は、未だ曾つて例が無かつたのである。

顧みれば——日露戦爭當時までは、飛行機も潜水艦も海戦に參加しなかつたので、海戦は純然たる平面戦であり、前歐洲大戦から初めて飛行機や潜水艦の參加によつて、立體戦を見るにいたつたのである。然もそれとても未だ今日に比べれば至極幼稚であつて、今回のやうな花々しい立體戦を展開する域には進んで居なかつたのである。

——兵器及びその裝備艦艇の發達に依り、海軍戦術即ち海戦術には、從來幾多の變遷を見たものであるが、今日に於ける飛行機、潜水艦の進歩發達は、他の新兵器の採用と相俟つて、斯くの如く現代の海上作戦方法に特異の大變革をもたらしたのである。

これがために、海上艦艇も現代の作戦に應ずるため、その攻擊力、防禦力、運動力の三要素

に著しき變動を來たしたことは云ふまでもない。即ち攻擊力は前述の如く砲熕の發達により愈々增大し、防禦力は裝甲と水中防禦の發達によつて益々强固となり、運動力も亦液體燃料と高率機關の採用によつて一層延伸したのであるが、攻擊力の發達と新兵器の出現は更に防禦力の增大を必要とすることゝなり、裝甲の增大、バルヂの裝著、防水力區劃の增加、排水裝置の增設等により安全率を增大せねばならぬことゝなつた。

しかも、今日に於ける艦隊の行動範圍は、過去のそれの如く局地的のものでなく、實に前記の如く——東西一萬浬に及ぶ素晴しい廣範圍にまで到達したのである。かくて、所要の時機に、所要の地點に於いて、所要の期間獨立して、確實に行動が出來ることを要求せられるに至つた。

然し、こゝに注目すべきは——海上戰略の原理は新兵器の發明、乃至は海上技術の變化によつても動かすことの出來ないことである。過去に於いて軍艦の砲裝に大きな變化があり、又推進能力が帆裝より蒸氣機關に變更された際でさへも、——海上戰略の基礎は決して變化することはなかつた。

畢竟、新兵器の採用に依つて生ずる最大の影響は、單に海戰の方法に變化を來したにすぎないのである。しかもその變化は、全然特別の狀況によつて起る場合のみである。

たとへば——魚雷が、初め軍艦の副武器であるに過ぎなかつた時代には、戰術に多少の變化はあつたが、戰爭遂行の形式には著しき變化はなかつた。ところが一旦この魚雷が水雷艇、驅逐艦及び潛水艦の主要武器となつて、動的に且つ攻擊的に用ひられるようになつて、忽ちその價値は跳躍的變化を生ずるようになつた。機雷も亦、これを撒布機雷として攻擊的に用ひられるやうになつてから、初めて——海戰の方法に若干の變化を來たしたのである。

魚雷、機雷に於てさへかうであるから、飛行機のやうな極度の運動性と驚くべき攻擊力を有する武器の出現が、今日の海戰術に一大變化を及ぼしたことは、これは當然中の當然であらう。全く實際に於いて——飛行機が、大東亞戰幾多の海戰に於ける作戰に及ぼした變化は、既往に於いて他の新兵器がもたらしたどの變化よりも、極めて大なるものがある。

しかし、飛行機も亦海戰に於ける一武器にすぎない以上は、——從來の戰略を全然覆すやうなことは、將來に於いても豫期せられないであらう。從つてこれから書く海戰術のことは、新

兵器の發達が如何にその方法に變化を及ぼしたか――に中心をおいて、述べてみたいと思ふ。

戰略、戰術、作戰

近代海軍に於いては、各種の艦船を併合統制して行動作戰に便ならしめて居る。今これ等に關して一通りの概念を持つことは、これから私の述べることを充分に理解する上に於いて、是非共必要であると思ふ。

（編制）これは、兵軍の單位を集團して軍隊を組織することである。

（隊形）この集團された軍隊が、作戰その他の行動のため、集會して形成する制規の形狀を謂ふのである。

（戰鬪單位）戰鬪部隊の兵軍を組成する最小單位であつて、戰鬪に當り分離別働せしめ得る兵力の極限を云ふのである。即ち海軍の戰鬪單位は――艦艇一隻である。

（戰術單位）戰鬪單位の數個を集合して、一人の揮揮統率の下に、戰鬪に從事する一隊を云

ふのである。

（戰略單位）――各種の艦型より成る戰術單位の數個を合し、一指揮の下に統率し、獨立して一方面の作戰に從事し得べき一團兵力を云ふのである。

右によつても、戰術と戰略の區別は略ぼ判るであらうが、要するに本質的には何等異なるものではなく、たゞその適用される範圍の相違に依つて、便宜上與へられたる名稱なのである。しかしこの區別、限界も、飛行機、潛水艦の出現發達によつて次第に曖昧となり、判然と區別し得ない特質を益々增大しつゝあることは、もはや周知の通りである。

以下、この兩者を說明するために、從來行はれてきた專門研究家の意見及び實例を書いてみよう。――由來、戰略には多種多樣の定義が與へられ諸說紛々たるものであるが、その代表的なものを擧ぐれば――、戰略の領域を、「戰爭の場合にのみ限定するもの」と、「平戰時を問はず準備し、兵軍を使用する術なり」とするものゝ二つの見解があるようである。しかし、いづれにせよ戰略の領域は――戰爭の計畫、準備及び實施の全般に亘るものであつて、その主なるも

のを擧ぐれば――、先づ兵力があり、編制配備行動があり、軍隊の教育訓練があり、水陸諸施設軍需品等の整備があり、次いで戰爭指導を必要とし、更に進んで作戰指導――狹義の戰略――が存在し、戰法戰術の適用が展開されるわけである。

緒戰以來、マレー沖、バタビヤ沖、印度洋にと連戰連敗の苦杯を嘗めたイギリス國民は、その上下を擧げて、「海軍は一體何をしてゐるのだ！　戰術を變へろ！」と昂奮してゐるようであるが、戰術を變へたところで、頽勢を如何とも出來ないことは明かである。

「戰術は十年を一期として變化す」

これは、ナポレオンの名言であるが、たしかに戰術は、その時代に對して人時地兵器と共に變遷して止まらぬものである。一八六六年、リツサ海戰に於いて、墺將テゲトフは七隻づゝ三段に構へた凸梯陣を以つて――單縱陣のイタリア艦隊を散々に破つたが、この陣形を鵜呑みにした清國艦隊は、日清戰爭に於いて逆に單縱陣の日本艦隊に破られてしまつた。兵器の進步――魚雷の出現、大砲射程の增進を考慮しなかつた缺陷によるものである。かくの如く戰術とは、まことに複雜多岐、しかも千變萬化して停止するところのないものである。

戰略の目的は、敵の抗戰意識を屈せしむるにあることは、云ふまでもあるまい。作戰は、この戰略目的を達成せしむるために執るべき手段を實行するものであつて、戰術を實施する行爲が作戰である。海軍戰略がその目的達成のために執るべき手段は、次の三つである。

敵海軍兵力の擊滅若くは無力化

敵領土の攻擊占領

敵の戰爭資源及び國民生活必需品の供給遮斷

――これを手段の實施即ち作戰方面から云へば、左の如くである。

制海權獲得作戰（決戰、封鎖作戰）

制海權行使作戰（海陸協同作戰、通商破壞作戰）

――日本海軍戰略が、その緒に就いたのは明治三十年頃日清戰爭の教訓を取り入れてからのことであつた。その後、日露戰爭を經て研究をつゞけられ、足らざるを補ひ、內容を豐富にして今日に至つたものである。その內容を要約すれば、――見敵必滅主義であると云ふの外はな

い。

今や、海軍戰略の有終の美の收穫は、刻々に迫りつゝあるが、それには空前の廣大さを持つた作戰海面と、躍起となり兵力增强に邁進する敵海軍の現狀を直視する必要があることを忘れてはならない。と同時に又、海上作戰の特質を認識し、諒解する必要があると思ふのである。

艦隊陣形の話

近代海戰に於いては、敵飛行機の危險を避けるためには、驅逐機や高角砲ばかりでは不十分である。一海軍が、その空中兵力に於いて敵よりも劣勢であればあるほど、飛行機の被害を戰術的手段によつて避けんとする努力は益々大となるのである。しかるに海戰に於いては、戰場は展望自在で敵も味方と同樣の利益を受くるので、陸戰の場合と異なり、戰術的手段を極度に制限せられるのは免れない。即ち交戰の際執るべき戰術的手段としては——、

「陣形の制定及びその變換、補助艦艇の配置及びその使用法、風、天候、光線並に煙幕の利用等が、殆んどその全部であつて」

特異の戰術で以つて、飛行機の影響を除去することは無理な要求である。しかし、適當なる戰術の應用で、他に大なる犧牲を拂ふことなく、空中よりの脅威を少しでも少くすることは不可能ではない。これに關して、今日及び將來の艦隊陣形に就いて語つてみよう。

（戰鬪陣形）

飛行機の絕大なる運動性への對策として、艦隊の陣形にも大なる運動の自由性を必要とすることは、當然の事であらう。これは又、潛水艦の發達に對しても同樣である。たとへば前歐洲大戰まで一般に行はれたやうに、大切なる主力艦を、各艦の距離短小なる戰隊として、密集のまゝ戰鬪に從事せしめることは、もはや今日の海戰では適合しないであらう。之に反し、從來戰鬪中極度に密集するのを例としたところの陣形を、斷然大開距離に改むることは、最も適當なる處置と云ふべきである。

かくの如く距離を開大することは、昔のやうに大砲の射程の短い場合に在つては、砲火の集中効果に於いて、又視認信號に依つて戰隊の運動を指揮してゐた場合に在つては、戰隊の統率上に於いて各々不利を感じたのであるが、今日の如く射程の延長と無線通話の完成したる場合

には、最早それ〴〵の障碍を大部分除去し得たのである。かくて各艦の距離は約千米に延長し、戰列中の軍艦も最早嚴密に規定の距離と前續艦の航路に捉はれる必要なく、艦隊の旗艦は隊の中央に在つて針路の變換速力の增減を命じ、各艦は開距離にあつて艦長の判斷によつて必要に應じ、隊列より横に出づるの自由を與ふることが、最も有利と考へられる。かくの如き開距離戰鬪隊形は、距離五百乃至六百米の密集隊形に比して、隊列延長し、艦隊旗艦の指揮は多少不利とはなるだらうが、又更に次のやうな重要なる多くの利點もあるのである。その結果として、空中並に水中よりの脅威を減少し得ることも出來るのである。

「各艦は密集隊形にあるよりも、もつと冷靜に、もつと確實に運動することが出來、大角度の針路變換又は戰鬪中の緊急回頭等に際しても、戰列に何等の動搖を起さない」

「煤煙、砲煙が從來のやうに全戰列を妨害することなく、各艦は全般の戰況を自由に觀察することが出來る」

「各艦は特に危險なる事故發生の場合、前續艦と衝突する憂なく、自由に運動することが出來る」

「特に敵彈に惱される艦を生じたるとき、他に大なる妨害とならないやうに、煙幕を以てこれを掩蔽することが出來る」

「戰隊を目標とする敵の魚雷襲擊を困難ならしめ、從來よりも命中率を著しく低下せしめる」

（航行隊形）

敵の空中偵察圏内では、夜暗でなければ艦隊の隱蔽は不可能で、艦隊は早晩敵に發見されるものと覺悟しなければならない。敵の偵察機全部を驅逐することは、その實行に於いて頗る困難であるが、唯一の可能性は、敵の觀察を誤らしむる一事あるのみである。即ち敵の空中偵察による觀察をなるたけ不明瞭にし、從つてその發見報告を不正確且つ疑義多きものとすることは恐らく可能のことで、努力の價値あるものと信ずる。この對策として航行中の艦隊は、發見せられ易き大集團を以て行動することなく適宜小集團に分れ、その時の視界に應じて、廣正面で航進するのが得策であらう。又小集團は各種の艦艇を以て編制することを可とすることもあらう。その場合には、原針路は直接目的地に指向するときでも、又會合點に向ふやうに指定するときでも、個々の小集團は成るべく異つた針路を採り、又ある場合には一集團と他の集團と

合同し、ある時間の後再び分散する等、いろ〳〵の變化をなすのを有利とすることがある。要するにこれ等は皆、敵の觀察を誤らせる手段に外ならないのである。

今次大東亞戰幾多の海戰に於いても、アメリカ、イギリス艦隊が、かゝる手段方法を講じたことは、既に幾多の實例の示す通りである。

又一方、分散航行序列に於いては、その警戒面が擴大するので、從來のやうに巡洋艦を以て傘狀の警戒航行隊形を採ることは困難であるが、飛行機は巡洋艦に代つてよく艦隊を警戒し、不意の會敵を避けることが出來るのである。萬一視界が減少するとか、天候不良となつて飛行機を以てする警戒を中止せねばならない時は、敵も空中偵察を中止する時であるから、分散航行隊形を止めて、警戒は從來のやうに巡洋艦の任務に移ることゝなるのである。

但し、日本海軍の飛行機は、相手が空中偵察を中止するやうな相當天候不良の場合でも、敢然飛ぶといふことは、支那事變初期に於ける長距離渡洋爆擊の實證して餘りあるところである。

制空權と制海權

制空權の爭奪戰は、海上權獲得のための各種手段の一つに過ぎないのである。換言すれば、制空權の獲得は制海權獲得上の絕對必要條件であつて、同時に又制空權なきところに制海權獲得は不可能なりとさへ云ひ得る。

——海上に於いて、或る企圖を有効に遂行するためには、少くとも一定時間殆んど完全なる制空權の掌握を必要とする。例へば、敵國沿岸に對する作戰の如き場合である。その他の場合に於いてはこれと異なり、空中に於いて充分なる優勢を保つか、又は敵と同等の兵力を有するのみで充分であらう。

——制空權爭奪戰をば、單獨の戰鬪と考へるのは正しくない。何となれば、この種の戰鬪は企圖されたる海上作戰と——密接なる連繫を保つてこそ始めて意義を有するからである。しか

し制空權爭奪戰は、或る場合に於いては、海上の戰鬪行爲に先だつて行はれ、他の場合には同時行はれることは勿論であるが、交戰國間の距離がこの戰鬪の時機に大なる關係がある。

萬一、交戰國が隣接してゐる場合、又は少くとも兩者の前進根據地が極めて近接し、その往復距離が飛行機の行動半徑以內にあるときは、兩者は互に敵の航空根據地及び飛行機格納庫等に對し爆擊を行ひ、以てその航空兵力を殲滅することに努めるであらう。この場合に於いては、空中戰鬪に於けるよりも僅少の犧牲を以て迅速に効果を收めることが出來る。

これに反して、廣大なる海洋を隔てゝ行れる戰爭に於いては、味方水上兵力の行動開始前に、前述のやうな方法で敵の航空兵力を擊破し、又は殲滅することは不可能である。何となれば、攻擊軍は飛行機の活動に必要なる根據地を有してゐないからである。從つて先づ飛行根據地を設置することが必要であつて——航空母艦を以て、長時間飛行機の根據地としようといふ考へは、重大な錯誤である。

このことは、今次幾多の海戰に於いて、アメリカ空母が失敗を演じて居る通りで、その搭載飛行機が敵地に進入するや否や、忽ち空母は敵の攻擊を受けねばならぬからである。アメリカの場合は、その進入して來た飛行機は勿論擊墜され、空母もわが潛水艦、飛行機によつて擊沈されて居るではないか。

元來、航空母艦なるものは、艦型巨大で攻擊力薄弱であつて、近代艦隊にとつては最大の弱點で、艦隊長官にとつては絕えざる心痛の種である。何となれば、航空母艦は長官麾下の兵力の重要なる部分を包藏し、しかも甚だ損害を受けやすく、僅かの傾斜でも、もはや飛行機はこれに著艦することが出來ないからである。故に航空母艦は、この理由によつて、敵の飛行機、潛水艦及び驅逐艦の第一攻擊目標となるであらう。しかも反面には、最初の戰爭目的として根據地設置のため、輸送船、彈藥船及び工作船の大集團を必要とするので、狀況によつては、この掩護のため、全戰鬪艦隊の出動を必要とすることもあるであらう。

かくの如き大規模の作戰には、必ず空中戰鬪を伴ふもので、その目的は單に最初に行動の自由を獲得するためと、爾後更に確實なる制空權を得るために、空中戰鬪の準備をなさねばならない。

——制空權は、概して局所的のものである。何となれば、飛行機は速力が大であるので、一

旦敵機を撃滅しても、新なる航空兵力が短時間で敵の他の地點から、その場に到著し得るから——併し一旦獲得した制空權は相當期間永續するものである。何となれば、現用飛行機は極めて短時間で製作し得るものではあるが、損失飛行機の補充に當つては、先づ人員の訓練を問題とせねばならぬからである。この意味から見て、目下狂奔してゐるアメリカ空軍再建に於いても、單に豫定の臺數だけ飛行機は完成しても、その人員の訓練がこれに平行せぬ限りは、佛作つて魂入れずと同結果に終るのでないか。

制海權獲得の上に於いて、飛行機の受持つ大きな役割の一つに、偵察といふことがある。——眼高二十五米の軍艦の見張りは、視界良好なれば十浬半の見張半徑で、その面積は三百一平方浬である。しかるに、高度六百米の飛行機からは理論上五十一浬の距離の水平線を見廻はすことが出來るから、その見張面積は八千六十三平方浬に達するのである。しかも尙ほ、飛行機は著しき高さまで上昇し得るから、その視界も增大することは明かで、この數字は偵察任務上、飛行機が著しく艦船に優ることを證明するに足るのである。

——即ち、五隻乃至六隻の巡洋艦の偵察し得る範圍を、飛行機は僅かに一臺で偵察することが出來る。そこで、その能力を二つの方法に利用することが出來るのである。その一つは、從來巡洋艦の任務であつた偵察及び警戒に飛行機を用ひ、これによつて餘裕が出來た巡洋艦を他の任務に用ふるか、又は巡洋艦を節約することが出來る。もう一つは、元來偵察任務には不足勝ちであつた巡洋艦の補足として、飛行機を用ひることが出來る。いづれにしても、海上作戰には飛行機の高速であることが極めて重要であつて、これがため晝間敵の方向に對して、敵艦隊の推定最大一晝夜航程を下らない距離まで偵察することが出來る。その偵察力の偉大なることは、實に驚くばかりである。

かくして、防禦軍は早期に敵を發見して、最も有利なる會敵の時機及び地點を選定して味方兵力を集結し、或は潛水艦隊を前進させ、或は敵の前路に戰術的機雷堰を設置し、尙ほ味方兵力は、光線、風向、海上の狀況等を充分利用し得る位置を占位することが出來るのである。即ち、偵察機を有効に使用して敵狀偵知に成功することは、海上戰鬪勝利の第一歩である。

しかし乍ら、こゝに注意すべきは、飛行機の能力は偵察任務上無制限のものではない、とい

ふことである。

第一に晝間の長短に制限せられる。何となれば飛行機の偵察能力は、夜間は軍艦のそれ以下に低下するからである。又、飛行機からの觀測は、強い風壓のために妨害されて、前方の水平線を見るために双眼鏡を使用し得ないこともあり、尙ほ明るさが減ずるにつれ飛行機からの偵察は、その利點が減じ、夜になると狀況は一變して偵察には軍艦の方が有利となる。次に、雨天や降雪等のために視界が狹い時——又は强風の時には、飛行機の能力は軍艦よりもずつと減殺されるのである。

前歐洲大戰の時、戰略的偵察のためドイツ、イギリス海軍共に、北海の戰場に於いて盛んに潛水艦を用ひて良果を收めたものである。

潛水艦は、概して敵に發見される恐れが少く、且つ攻擊を受ける機會も少く、終日敵國の沿岸に出沒して附近の交通狀況を偵察することが出來るのであつて、この利點は水上艦艇では、とても及ばないところである。

潛水艦の戰略的偵察を完全に遂行するのに、唯一の不利は——その眼高が低いために、敵を

發見することが困難である。しかるに、今日に於いては、この缺點は飛行機の協力に依つて除くことが出來たのである。即ち、甲板に固定裝置を設けた小型飛行機搭載潛水艦の建造を見るに至り、既に今次の大戰では、これ等が活躍してゐるようである。かくの如き飛行機は、敵に發見せられないで遠い海面を渡り、敵岸近く運ばれ、適當なる海面より飛揚し、——潛水艦の觀測眼高を任意に高むることが出來る。かゝる飛行機と潛水艦との協力によつて、終日敵の交通を監視することが出來る。——かくて今日の海上作戰には、晝間の行動を秘密に保つことは不可能であつて、たとへ、敵主力が遠距離にある場合でも、同樣なことを念頭に置かねばならない。水上艦艇が敵に發見せられないで行動し得るのは、たゞ夜暗に於いてのみのことである。

以上に依つて、制空權と制海權及びこの兩者に對する飛行機の位置といふものが、概略お判りになつたことゝ思ふが、次に近代戰に於ける——艦隊決戰の一場面を描いてみよう。

兩國艦隊は、決戰の意圖を以て、二、三百浬を隔てゝ觸接中と想像する——。この時、兩艦

隊の前方には、既に空中に於いて敵味方とも若干の飛行機乃至飛行艇は悠然とその巨體を現はしてゐる。そして可成り詳細な敵の動靜を各々味方の長官に報告してゐる。又その下方には、既に列を解いた數臺の飛行機が、勇敢にも近づけるだけ敵艦隊に接近して、斜前から空中撮影に從事してゐる。そして間もなく、味方の長官旗艦の上に歸來して、出來たばかりの寫眞の種板を投下する。かくて、砲戰が始まるずつと前から、兩軍司令長官は互に連續的に敵の行動を承知して居るのである。

この際、煙幕を張つて、その艦影を隱さうとしても駄目である。何となれば赤外線應用の寫眞機を備へた飛行機は、恰かも何もない靑空の時と同樣に、この煙幕を透して容易に撮影が可能となつてゐるからである。

艦隊の戰鬪序列は、從來と稍やその趣きを異にする。——即ち潛永艦は先づ、對敵行動を始める。そして出來るだけ深く潛航して、敵飛行機からの發見を避けつゝ進み、目標である敵の主力に近付いたと思ふ頃、徐ろに潛望鏡で見えるだけの深度まで上つてくるのである。

その後方には、味方の驅逐艦部隊が、その快速を發揮して巧みに、敵の襲擊隊であり、又防

禦の第一線部隊である潛水艦幕を衝き切つて驀進する。次には、巡洋艦部隊がこれに續航してゐる。この巡洋艦隊は、少くも一隻毎に一臺の飛行機が附屬してゐて、これ等は偵察任務に使はれる。又、各艦とも高角砲と、それを指揮管制する指示器を備へてゐることは云ふまでもない。

これ等巡洋艦が攻擊態度に出る場合には、その任務たるや、一は味方驅逐艦の攻擊前進を援護し、他は主力部隊の一翼を保護することであつて、一面には防禦線の第二線を形成することにもなつてゐる。

しかる後、順序として主力艦が出てくる。これ等の巨艦は例の主砲十六吋砲を有し、依然近代海戰に於ける重大なる打擊のやり取りをする底力を備へてゐるものである。その又後方には、航空母艦が控へてゐる。そしてその艦上からは多數の飛行機を飛ばせて攻擊に向はしめ、兼ねて偵察任務に從事させ、更にその一部を以て主力部隊の彈著觀測を行ひながら、味方の砲擊を有利に導いてゐるのである。

かゝの如く、近代海戰にあつては航空部隊は艦隊戰鬪に主要なる役目を勤めるものであり、

又その最初の任務としては、味方の動靜を敵に偵知されぬ樣に、これを防遏することが最も肝要となつて來たのである。

從つて、今日の海戰劈頭に於ける場面は、先づ空中戰鬪の出現であり、これは今次のハワイ海戰マレー沖海戰を見ても判る。但しこの場合は、わが飛行機のみを以つて、敵艦隊を擊滅し得たのであるが、その背後にはわが戰鬪艦隊が嚴然と控へて居たことを知らねばならない。

そこで換言すれば、航空部隊に對し要求することは、敵の主力部隊をして有利に展開させぬやうに、先づ最初に、これを攻擊することであり、同時に同じ目的を持つ敵の航空部隊を擊破することである。かような狀態を想像するならば、今日の海戰の勝敗は、一つに空中に於ける優越如何によつて定まると謂つても敢て過言ではあるまい。

――さて、兩軍主力艦隊の合戰準備が終つた頃には、――空中では既に兩軍の航空部隊が入り亂れて、戰はまさに酣である。今一方の旗艦では、無線電信室が多忙を極めてゐる。その途端に、十六吋の巨彈が、その艦の砲塔から恐ろしい唸りを立てゝ砲口を辭した。

數秒の後には、空中から――

「近――四〇〇米、右五十――十六時〇分」

といふやうな報告が屆いてくる。前に發射した彈丸は、四〇〇米の近彈で、且つ右に五十米はづれたのである。次回の射擊はこれを修正して、忽ち――全砲臺砲火開始の命令が下る。

――間もなく、一せい射擊が始まつた。

勝敗の決、まさに近きにありと思はれる。

通商破壞戰に就て

經濟力の破壞へ

近代戰は國家總力戰であることは、何人も周知の通りであるが、敵國の經濟力破壞を企圖する作戰行動が開戰と同時に開始され、それが益々激化されて行くことも亦、近代戰の一つの特質である。即ちこれは、海上武力戰の蔭に相當長期間に行はれる——通商破壞戰の展開である。

この通商破壞戰は常に優勢海軍國のイギリスが敵國を苦しめる手段として用ひて來たものである。然るに前歐洲大戰當時劣勢なるドイツ海軍が、イギリスの經濟封鎖に對抗して、苦しまぎれに演じた例の無制限擊沈の潛水艦戰術が實に重大なる結果を招いたのである。その結果イ

ギリスは、一時完全なる逆封鎖を受けて、まさに餓死線上をさまよふ苦惱に直面したのであつた。

今次歐洲大戰に於いても、ドイツはいち早く勇敢なる戰法を以つて、徹底的な通商破壞戰を展開しつゝあり、その造船能力を誇る流石のイギリスも相次ぐ商船の擊沈に、悲鳴を擧げてゐる狀態である。かくの如き通商破壞戰術の威力の前には、近代戰は全く戰爭形態を一變するに至つて、吾人は單に——海上ゲリラ戰的一戰法として、看過することは出來なくなつたのである。

——通商破壞戰は、潛水艦、飛行機その他の水上艦艇によつて行はれるが、特に今日に於ける潛水艦、飛行機の著しい進步はとりわけ通商破壞戰に於いて、素晴しい威力を示して居る。過般發表されたイギリス側船舶被害狀況によれば——、

潛水艦によるもの——約五三パーセント

飛行機によるもの——約二一パーセント

その他の水上艦艇によるもの——約二六パーセント

といふ記錄を示してゐるのを見ても明かである。實際、今日の潛水艦は前歐洲大戰の頃から見れば、長足の進歩を遂げて居る。日本の潛水艦に於いても亦然りである。その實證として左の一文を拔抄してみよう。それは、本年六月わが無敵潛水艦が長驅して突如、アメリカ西海岸オレゴン州に現はれ、果敢な砲擊を開始したことがある。これは當時アメリカの各新聞に揭載された——日本潛水艦砲擊目擊記であつて、最も雄辯にわが潛水艦の威力を語るものである。

六月二十一日夜(アメリカ時間)私は海岸ホテルの二階で突然大きな砲聲をきいた。

ダアン、ダアン——夜の靜寂をゆすぶつて遠雷のやうな砲聲だ。私はひどく驚いてバルコニーへ飛び出してみると、砲聲は暗い海上から二發、三發ときこえた。

夜の闇の中に彈道は眞ッ赤な孤を描いて稻妻のやうに閃いた。次の瞬間、陸地に火山の爆發のやうな物凄い爆發が起つた。

その時、私は前夜バンクーバー島を砲擊した日本潛水艦を思ひ出した。大膽不敵な日本潛水艦はつひにアメリカ大陸の沿岸に出動して砲彈を叩き込んでゐるのである。その日本潛水艦の

來襲にすら氣づかず、擊退しやうともせぬアメリカ海軍は一體太平洋に居るのか。

「アメリカ海軍の馬鹿、何をしてゐるんだ。何故出動しないのだ」

私は叩き出すやうに叫んだ。しかし、この重大なニュースを一刻も早く打電せねばならぬと思つて、タイプライターに飛びついて「日本潛水艦出現第一報」を叩きはじめた。

ダアン、ダアン——空を、大地をゆすぶるやうに砲聲はつゞく。この砲聲に驚いた市民は寢床から跳ね起き、あわてゝ電燈をつけたり、消したりして狼狽してゐるのが手にとるやうに見える。全く、寢耳に水の市民たちにとつては潛水艦の砲擊か、日本空軍の爆擊か初めは見當がつかなかつたのである。

私がタイプを叩きながら數へた砲聲は十二發か、十三發であつた。そのたびに砲彈が大氣を裂く無氣味な音、赤い彈道が實に鮮やかに、しかし、瀕死の重傷者の血の色のやうに見えた。

この夜の砲聲はコロンビア河口近く約二十マイル平方の地域で聞くことが出來た。人々は恐怖の夜が明けきるまでがた〳〵とふるへ、太陽が昇ると申し合せたやうに、

「アメリカ海軍は何をしてゐるんだ」

と、憤懣を投げ合つた。

日本潛水艦の出現――これが三度目であるが、このバンクーバー島とオレゴン海岸の猛擊は實にアメリカの横つ面に加へられた痛烈きはまりない平手うちだつた。

その日本潛水艦は、太平洋上で片つ端しからアメリカの船を擊沈する。

大西洋ではドイツ潛水艦が横行する樞軸の攻擊は正にアメリカ大陸の東、西兩岸にひしひしと迫つてゐる。

ところが今や、日本海軍の潛水艦は、通商破壞戰の元祖ドイツ潛水艦と遠く大西洋上に出擊し協同作戰に從ひつゝあることは、既に述べた通りである。ドイツ潛水艦の性能も亦我に劣らず、英獨海戰匆々その魚雷によつて、只一擊の下に、二萬噸の航母カレーヂヤスが一番槍に斃れ、又スカパーフロー軍港の奥深く闖入せる五百噸級のE二七號は、三萬噸級のイギリス戰艦ロイヤルオークを見事沈沒せしめて、米英海軍の心膽を寒からしめたのである。

――潛水艦の通商破壞戰に對する脅威は、今日に於いて全く高度化され、排水量に於いても

航續距離に於いても實に恐るべき性能を有するものが出現してきた。そして、堂々大洋に行動して、主作戰に參加活躍してゐるのである。アメリカの持つV型潛水艦の如きは、速力十二節航續力一萬二千浬を有してゐると云はれて居る。特に潛水艦それ自身の性能として、制空權や制海權とは無關係に、敵の監視をくゞつて自由自在に水中を横行出來ることは、敵商船にとつてこれ程怖ろしいものはないのである。

飛行機による、通商破壞戰の効果は、昨年末ドイツ空軍によつて遺憾なく發揮されて居るが、その他の水上艦艇即ち巡洋艦、驅逐艦等も適宜通商破壞戰に從事して、それ〴〵相當の成果を擧げて居る。

ドイツ海軍では、今次大戰の初頭から、袖珍戰艦なるものを使用して、ドイツチエランド・アドミラルシエアーの名は、全世界の耳目を衝動せしめたものであつた。

通商路の攻防

長期持久を必要とする近代戰に於いては、――多量の戰時物資を確保することが肝要である

ことは云ふまでもあるまい。從つて、これ等物資を獲得するためには、危險なる海面といへども頻繁に多數の商船を往復させねばならぬのである。

又、交戰國としては敵國への物資流入は極力これを妨害し、速かにその國力の消耗喪失を計るべきであるから、この兩者の關係に於いて、通商破壞戰は戰爭終了までは飽くまで根氣よく行はれるのである。從つてこゝに——當然、戰時通商の安全確保の問題が浮び上つてくるのであるが、その具體的方法即ち擁護手段は實に又、非常なる困難を伴ふものである。何となれば、前項に述べた如く飛行機、潛水艦の通商路への攻擊振りは、日一日と深刻を極めるからである。あまつさへ、通商護衞それ自體によつてすらそれだけ船舶の能率が減少せられ、いくら船舶があつても足りないといふ結果を生じ、各國とも、通商路擁護の問題に就いては多大の苦心を拂つてゐた。否、大東亞戰下の今日、イギリス、アメリカの如きは相次ぐ輸送船の擊沈破に、殆んど施すに策を知らぬ有樣である。

その船舶保有量を誇るイギリスの如きは、今次大戰に先立ち既に一九三七年末から——集團護衞制に關する準備訓練を行つてゐたようである。ところがどうであつたか。かゝる準備訓練

も水泡に歸して、いざ實戰に直面すれば、忽ちドイツの破壞戰のために、支離滅裂の被害を受けてゐる現狀である。この通商保護の一手段として採用された「集團護衞制度」——は、前大戰に端を發して居り、ドイツの無差別潛水艦戰に苦惱したイギリスが、窮餘の一策として考案したものであつた。

當時イギリスは、これに依つて著しい好成績を擧げ、既に英本土に殘された食糧が僅かに三週間分に過ぎぬといふ所まで急迫してゐたのであつたが、この結果漸くドイツ潛水艦の魔手から逃れて起死回生の成果を得たものであつた。今日——通商擁護の手段としては、この方法以外にあるまいと云はれて居るが、これには——通商直接護衞と間接護衞の二つがある。

直接護衞とは、速力のほゞ同じやうな商船を一括して商船團を組織し、その周圍を驅逐艦又は飛行機等が護衞して、航行するものである。しかるに最近のイギリス海軍では過日の新聞報道に依れば——日獨伊空軍と潛水艦の猛攻に耐へかねて、船團を護送する艦艇にも不足しがちとなり、その虎の子の船舶を保護するのに、船舶の一隻から一個づゝの防空氣球を揚げしめて、樞軸側の攻擊を防ぎながら、恐怖の航海を續けて居ると云ふ。つまり氣球つき船團である。又

一方アメリカ海軍では、最近盛んに軟式飛行船を急造して、これを護送船團に配屬して、上空から潜水艦の攻擊を哨戒しやうと考へたやうである。

さて、殘る一つの間接護衛とは、ある特定の水域を商船團が獨り歩きをしても、完全なる程度に海上警備が施される場合を云ふのである。しかし、この船團の護衛には相當技術上の面倒が伴ふものであり、殊に同一港の船舶集合及び積荷に相當の時間を要し、その間に敵艦に探知襲擊される危險があり、又航海中も隣船との連絡通信、更に無燈航海、シグザグ(Z)航行等、あらゆる訓練と準備とを必要とするのである。

今次の大戰に於いては、ドイツ潜水艦はイギリスの商船護衛團に對して、逆に潜水艦の集團攻擊といふ新戰術に出で、又イギリスはその裏をかいて、護送船隊を十五平方マイル位の範圍にばら撒き、これを小型快速艦で護衛する方法を採つたりして居る。どちらの戰術がいゝかは、まだ今日以後の問題に屬するが、いづれにせよその攻防戰は益々熾烈化しつゝあるのである。

次には、攻むる側をば書いてみよう。元來、通商破壞戰の有効なる方法としては、敵國商船

航路の最も輻輳する地點、即ち主要入港目標の存在する地點、或は水道の入口附近でこれを行ふ時は、最小の兵力を以つて最大の効果を收めることが出來るのである。

かように商船の集中する地點に、通商破壞の巡洋艦が敵の妨害を受けることなく、長期間滯在することが出來たならば、その獲得する戰果は甚大であるが、かゝる海運の焦點は敵の領域であつても、或は中立國の領域であつても、いづれにせよ陸岸に近く存在するのが常であるから、敵側に於いても特別の注意を拂ひ、必ずその通商を保護するに違ひない。故にかような地點で、通商破壞の巡洋艦が敵に發見されることもなく、且つ妨害を受けることもなく滯在することは不可能である。

從つて必然、通商破壞艦艇は、敵國商船及び中立國船舶に積んで居るその戰時物資を、洋上はるかの公海に求めねばならぬのである。この場合、廣漠たる洋上で、巡洋艦又は巡洋潜水艦が飛行機を用ひる時は、その視界を約五倍に增加することが出來て、自ら發見される以前に、遠距離から相手の商船を認め得るから、その効果には極めて著しいものがあらう。前大戰中、ドイツ補助巡洋艦ウルフが、その搭載飛行機によつて大なる戰果を收めたのは、これに對する

絶好の證左である。

又、今日の通商破壞戰に於いて、飛行機は單獨でそれを行ふことは出來ず、依然として巡洋艦、潛水艦等の補助機關たるに止るとの說があるが、これは外國海軍のことである。日本海軍の飛行機は、イギリス、アメリカの不沈戰艦を片つ端しから單獨で擊沈してゐるから、通商破壞艦などは朝飯前である。又、通商破壞戰に於いて、艦載飛行機に與へられる重要な任務は、巡洋艦が商船臨檢中、又は燃料糧食補給、その他の行動に支障あるやうな作業中、敵の巡洋艦より急襲を受くることなきやう、これが警戒に任ずることである。

焦點下のパナマ運河

大東亞戰爭勃發以來、アメリカ海軍がパナマ運河防衛に對して、鋭尖なる神經を拂つてゐることは、何人も容易に想像し得るであらう。

同運河が、アメリカの海軍政策上重大なる意義を持つことは、今更喋々する必要もあるまい。今次開戰以前に於いて、アメリカ國內では——パナマ運河のみではアメリカの國防安全感が充分でないとの議論が屢々繰返されて居たのである。その理由は、——パナマ運河の閘門式は、敵機の爆擊によつて容易に破壞される虞れがある。又スパイの一爆破でも三ケ月間の通航を不能とすることも容易である。且つ運河の幅員狹隘なるため運河の中に於いて通航の艦船が擦れ違ひ得ないこと等は、アメリカ海軍の遠洋渡航作戰に必要なる大艦巨砲主義とも矛盾し、大西、太平兩洋に作戰するアメリカ海軍にとつては危險を感ずるといふのである。

この理由は一應、大いに尤もではある。然し緒戰以來慘敗を喫してゐる彼等にとつては、こ

の大西、太平兩洋を繋ぐ唯一の捷路たるパナマ運河は依然として大きな戰略的價値を有するものであり、從つてアメリカ政府は神經過敏ならざるを得ないわけである。そこで――巷間よく、「日本海軍は何故パナマを破壞しないのか」と云ふ言葉を聞くが、「これは戰機未だそこまで熟せず」として、多くを語ることを避けたいと思ふ。「餘りに早くパナマを壞したら、容易に大西洋から太平洋へアメリカ艦隊が現はれなくなるから、その擊滅にそれだけ手間取るわけである。故に――」など、評する言葉も聞くが、これは常識的に見て或はさうかも知れない。航行中の不沈戰艦をすら擊沈せしめるわが海軍航空隊にとつて、「パナマ運河の爆擊位は、蓋し朝飯前であらう」と考へるのは、蓋し當然ではある。

さて、前述のアメリカ國內での議論の的となつた如く、現在のパナマ運河の艦隊通過といふことは、可成り厄介なものであるらしい。それは、三萬五千噸の主力艦でさへも運河通航には最大の戒心と愼重の取扱ひを執らなければ安全且つ迅速に通過が出來ない實情にある。又、何年か前の大演習の際、當時アメリカ全艦隊百數十隻を二十四時間內に通航させて見せる、といふ觸込みだつたのが、結局四十八時間もかゝり、且つサラトガ、レキシントンの如き艦型の大きな航空母艦は運河の閘門に閊へてそれを破損した程であつた。

爾來、アメリカ海軍當局は、このパナマ運河をその儘大西、太平兩艦隊の移動作戰に用ひることの危險を露骨に强調し、同運河の擴張計畫を力說して來た所以である。

然し、運河の擴張計畫といつても、容易なる業ではない。その後、一部分の擴張は實現したかは知れぬが、まだ〳〵舊態依然たるものと思はれるのである。

そも〳〵パナマ運河がアメリカの手に依つて開鑿されたに就いては、中々面白い話が少くない。

元來アメリカ人の祖先は北歐海洋國民であつたからして、海洋發展に力を盡すのは自然の趨勢で、漁業と海運業とは著しき發達をとげたのであつた。獨立戰爭後、アメリカ上下は支那貿易熱に浮かされ、一時非常な盛況を呈したことがある。然るに一八六一年に勃發した南北戰爭は五年間も續き、同戰爭後十五年間は、漁業も海運業も見る影もなき有樣に放擲せられ、支那

貿易も殆んどその跡を絶つに至つた。これは、同戰爭がアメリカ國民をして、國內整理に沒頭せしめ、海洋精神を喪失せしむるの結果を招いたからである。

しかし、年を重ねると共に、漸次國內整理も良好に進展し、着々その面目を改むるに至つて、再び海洋發展の希望が、その最も文化の發達した東部諸洲の國民から唱道されて來た。これに伴つて、海外貿易殊に支那貿易に對する捷路を得んがために、パナマ運河開鑿運動が彼等の間に猛然と起つてきた。と云ふのは元來、アフリカの南端をめぐるロンドン支那間の距離は、南米の南端を迂回するニューヨーク支那間の距離と略ぼ相等しかつたのであるが、一八六九年に——スエズ運河が開通することになつて、ロンドンから支那の距離は、ニューヨークのそれよりも二千浬も近くなつて、アメリカが如何に大陸橫斷鐵道を敷設しても、そ　輸送力も運賃の點でも到底イギリスとの太刀打ちは出來なくなり、アメリカの對支貿易は前途暗澹(たん)たるものとなるからである。そこで支那貿易を復興せしめるためには、——スエズ運河と逆にパナマ運河を開鑿して、ニューヨークをロンドンよりも二千浬支那に近寄らさうと、アメリカ朝野が眞面目に考へ出したのであつた。この間數十年、各種の國際情勢の推移を經て例の米英間のクレイ

トン・パルワー條約（兩國共單獨では地峽運河も開鑿しないといふ約束）は廢棄されそれに代るヘイ・ボーンスフォート條約が一九〇二年に締結され、こゝにアメリカは堂々と開鑿工事に着手し得る狀態となつた。

その後、當時の運河地帶の主權者コロンビヤ政府との商議不調、パナマ共和政策の獨立承認次いで米巴運河條約の協定等諸般の難問題も迅雷疾風的にルーズベルトの巨棒外交によつて解決されたことは、周知の通りである。かくして、運河工事は一九〇四年五月より開始されたが、こゝに亦々工事の進捗につれて、英米間に例のヘー・ボーンスフォート條約を巡つて、新しき葛籐が生れた。然しその葛籐も結局、イギリスの功利外交はアメリカの武斷的外交に仕て遣られた結果となつて、鈍重なジョンブルは狡慧なアンクルサムのポテンに引懸つて、眼を白黑してゐる漫畫となつてけりが付いたのである。

こゝに於いてアメリカは、その所有を絶對ならしめるために、莫大な費用を投じて、運河地帶の防備に懸命の努力を拂ひ、運河東西の兩出口には堅固な要塞を築いて、通航船舶を宛然要塞地帶內に監視してゐるやうな方法を執つてゐるのである。

その太平洋岸の一例をとつて見ても、フラメンコ、ペリコ、ナオスの諸島には强力な要塞を

構築し、バルボア港からナオス島に達する三浬の堤防には海岸砲台を設けて、十六吋、十四吋、六吋砲などの重砲を裝備し、陸上には更に野戰築城を起して步騎砲數ケ聯隊を常備し、且つコソロ飛行場には有力なる空軍を配置し、その他船渠、燃料貯藏所、軍需倉庫、艦船修理工場など、開戰以前に於いては大艦隊の前進根據地として殆んど間然するところなきまでの發展振りを示してゐるのである。

ましてや、開戰以後に於ける今日のその防備と警戒振りは、想像に餘りあるものと思ふ。

パナマ運河の閘門式航行のことは、既に新聞雜誌や映畫等に依つて宣傳されてゐるから省略するが、私は明治四十三年パナマに遠洋航海をしたことがある。當時は丁度工事の最中で、親しく最も難工事とされたクレブラ掘鑿を見たのであつたが、――ダイナマイトの爆破、スチームショベルの浚渫に依つて、大きな山が切取られ行くのを見て、痛快禁じ得なかつたことを思ひ出す。

以上簡單ながら、パナマ運河の概要を述べたのであるが、同運河がアメリカの對樞軸作戰に於いて、今後いかなる使命と威力を發揮するかは輕々に豫測を許さぬところである。

碇泊戰その他

空の脅威が生れて以來、海軍戰務に全然新奇の業務が加はり、これが取扱ひには大なる注意と深い思慮とを要するようになつたことは、屢々述べた通りである。

前歐洲大戰までは、艦船が軍港や根據地にゐる間は、――機雷堰、海岸要塞、哨戒艦艇等の力で、全く確實に保護せられたのであつた。この碇泊中の休養とは、航海中並に活動時の神經の緊張を弛め、過勞を慰さめるために必要なことであるが、今日の海戰にあつては最早この休養と安全とは期待することが出來ず、――却て碇泊中の艦船こそ、敵の爆擊に對する好目標であつて、殊に晝間その碇泊位置を偵知された場合に於いては、夜間といへども決して安全ではない。

こゝに――碇泊戰なるものが生じて、不斷の注意と敵機爆擊の對策を講じ、海上の戰鬪に用

ひるまでの艦船兵器の保護に對して、萬全の處置をとらねばならなくなつたわけである。

ハワイ眞珠灣に於いて、わが海軍航空部隊と特殊潛航艇の猛襲に、一たまりもなく潰滅した碇泊中のアメリカ戰艦その他は、この碇泊戰の典型的敗北の實例と云ひ得る。彼等は餘りにも、その海上の戰鬪に用ひるまでの艦船兵器の保護に對して、注意を怠り油斷をし過ぎて居たわけである。つまりは、身から出た錆と云ふの外、どうにも致し方はあるまい。

又、――交戰國の一方が、ある期間守勢を有利とする場合には、殊更に決戰を避けてその艦隊を防備安全なる根據地に控置せんとするであらう。從來は、こんな場合陸戰と同一方法で敵艦隊に決戰を强要することは不可能であつて、若しもこれを成し遂げようと思ふ時は、陸軍を以てその背面から敵の根據地を占領するか、又は敵を誘き出すだけの戰略的手段を必要としたのであつた。

過去の戰役に於いても封鎖、通商破壞、沿岸砲擊、後方連絡の遮斷等が、屢々この種の强要手段として用ひられたことは、周知の事柄である。

ところが今日に於いては、飛行機の參加に依つて、更に有力なる强要一手段が增えたのである。即ち攻擊軍は、敵の根據地及び艦隊を空襲し、敵をして出動を餘儀なくせしむることが出來るようになつた。これが實例に就いてはプリンス・オブ・ウエールズ及レパルスの新嘉坡出港は其適例である。又其他今次歐洲大戰、大東亞海戰に於いて、既に御承知ずみのことゝ思ふから省略する。

かくの如く――飛行機を以てすれば、交戰國の一方が決戰を避けんとする場合にあつても、これに反對の意志を强要することが出來ることとなつたのである。

これは――移り行く海戰の樣相として、最も顯著なる點と云はねばならない。

次に、――直接封鎖の自然的消滅と云ふことであるが、前歐洲大戰中ドイツの潛水艦、驅逐艦及び機雷の脅威に依つて、イギリス海軍はその艦隊の絕對優勢であるにも拘らず、ドイツ沿岸要地の砲擊も、河口に於ける直接封鎖も、皆これを斷念したことは今尙ほ世人の記憶に新なるところである。

今日異常に發達した飛行機は、戰略的守勢に依るものにとつて、極めて適當な武器であつて、

機雷及び潜水艦等の水中武器に比し遙かに有効なのである。

従つていやしくも防禦軍が空中兵力を持つてゐる以上、――攻撃軍は封鎖の目的で、長時間敵國沿岸に滞在することは不可能である。今日及び將來にあつては、「唯だ空中兵力を持つてゐない國に對してのみ、直接封鎖を實施し得るだけである」完全なる海上兵力を持つてゐる國は、必ずこれに相當した空中兵力を持つて居るから、このやうな國同志の戰爭に於いては、――この直接封鎖といふことは今後行はれなくなつた、と見るべきが至當であらう。

封鎖に從事中の海軍が、――完全に海上權を掌握してゐる限り、間接封鎖でも直接封鎖と同樣の効果を表はすことは、前大戰中ドイツに對して行はれたイギリスの封鎖が、明かにこれを證明してゐる。

かくて直接封鎖を有利とする過去の理由は、全然失はれたばかりでなく、今日――海戰の一手段として直接封鎖は斷念せねばならぬといふ有力な他の理由は、――飛行機が廣漠たる海面を監視し得る點に於いて、何物の追從をも許さない程有効であつて、間接封鎖には最も適するからである。

今度は、海戰に於ける――艦隊の射擊に就いて述べてみよう。前の砲熕兵器の威力のところで、輕くこのことに觸れては置いたが、もつと具體的に更に深く書いてみたいと思ふ。

大砲の威力增大に伴つて、射距離は益々延伸して、今日の砲戰開始距離は、概ね次のやうなものとなつた。

十六吋(四十糎)砲	三萬米内外
十四吋(三十六糎)砲	三萬米内外
八吋(二十糎)砲	二萬米内外
六吋(十五糎)砲	一萬五千米内外

射距離二萬米位までは、大型巡洋艦や戰艦の砲火指揮裝置から主砲の彈著を觀測することは困難ではないが、それ以上の遠距離で有効なる射擊を送るためには、飛行機から觀測を行ふ必要がある。即ち飛行機は敵の直上附邊にあつて敵の針路速力を正確に測定して、射擊艦に知らせ、射擊艦はこれによつて射擊諸元を決定して射擊を行ひ、爾後飛行機は刻々彈著を射擊艦に通報し、射擊艦はこれにより適當なる修正を行つて射擊を指揮すれば、敵艦の檣、或は煙突の一部だけが見える場合でも、有効なる射擊を行ふことが出來るのである。私は、岩手、丹後、薩摩の各艦の砲術長を歷任してきたが、「この有効なる射擊を如何にすれば行ひ得るや」に就いて、日夜頭を痛めたものであつた。

尙ほ今日では、精巧なる轉輪羅針儀附照準器が考案せられて、時々刻々變化する敵艦の方位を指示し得るやうになつて居るから、これと飛行機觀測とを併用すれば、たとへ煙幕その他に依つて、射擊艦から全然目標が見えなくても、有効なる射彈を送り得ることになつたのである。

この射擊指揮用轉輪羅針儀について、數年前のアメリカ海軍雜誌に、次のやうなことが掲載

されてゐる。

「三萬碼の距離にある見えない標的に對して、大砲の照準發射が出來るやうな羅針儀と、大砲の管制裝置に傳へ得るレビーター、又は傳導裝置を、過去十年間苦心研究の結果製出した。最初のものはマークX羅針儀、即ち射擊用羅針儀であつて、はじめて戰艦ニューヨークに裝備された」

從來、アメリカ海軍要塞では、旣んに——見えざる目標に對する射擊を實施してゐたものであつた。その方法は、——砲臺と目標とを一線に見えるやうに飛行機を往復飛行させて、砲臺はこの飛行機を狙ひ、別に彈着觀測用飛行機を用ひて適當なる修正を行ひつゝ射擊をするのである。

しかし、この飛行機による觀測を行ふには、旣に制空權を獲得して居れば問題ではないが、——飛行機の性能や敵飛行機の妨害、發著時機、收容方法等を考慮に置くときは、戰鬪中の觀測は中々容易なる業ではない。何故なれば、敵味方激しい立體海戰の眞つ最中に於いて、空中戰の間隙を縫ひつゝ、彈着觀測の使命を果すといふことは、餘程の性能優秀なる飛行機と豪膽

不敵の操縦士とを必要とするからである。從つて、アメリカ海軍の訓練して來た——見えざる目標に對する射擊の効果は、今日までの大東亞海戰に於いては、餘り發揮されて居らぬようである。

次に、集中射擊のことであるが、——二艦以上が同一目標に對して射擊する場合、彈著の錯綜を防ぐために發射の時機を異にするか、或は水柱に識別色を施す方法が發明されてゐるが、これだけではまだ充分と思はれないので、更に一歩を進めて、各艦の全砲火を一指揮官が掌握して、恰も一艦の射擊と同樣にすることも考へられて居る。

水柱に識別色を施す方法については——第二次ソロモン群島夜襲戰記の中で、海軍報道班員が——いろ〳〵と印象的な描寫で紹介されてゐたから、既に御存知のことゝ考へる。

さて、各艦の全砲火を、恰も一艦の如く統一することが出來たならば、集中射擊の隻數も增加することが出來て、その効果も一層增大することにならう。この目的を達成するためには、發射時機の管制、占位差の修正、並に精度の整合等を要することは勿論であるが、無線電信、電話、又は指數盤等によつて、命令號令を通達すると共に、各艦各自の修正を適切に行ふ必要

があるわけである。

對飛行機射擊の最も困難なる理由は、その速力が早いために對勢が急變するのと、彈著の遠近觀測が容易でないからである。殊に飛行機は年と共に高速化し、操縱術は益々向上し、急降下爆擊、艦橋掃射などが行はれるやうになつたので、その射擊指揮は尙ほ更困難となつて來た。

數年前より、飛行機射擊に對して、ブレデイクター（方向、高角、距離、上下左右の修正等を同時に測定し得る要具）フテレオ式距間觀測器等の研究が旺んに行はれて來たのであつた。

艦の動搖は、照準發射を困難ならしめると同時に、彈著を不羈ならしめて射擊効果を減殺することが多く、殊に小艦艇にはその影響が大きいので、從來これが防止法に就いて種々研究を進められてゐたやうであるが、過般ドイツに於けるペトラビツク・ギヤー（動搖中、艦が水平になつたとき發射する裝置）イギリスに於けるヘンダーソン・ギヤー（動搖中、いかなる位置に於いても、照準が來たとき所定の仰角で發射する裝置）等は、この目的のために造られたもので、略ぼその要求に應じ得るものと認められてゐる。

そこで、列國海軍に於いても、益々これに就いて研究實驗を進めてゐるようであるから、この動搖に對する障害は、遠からず解決されることになるであらう。

三つの海戰記

世界三大閉塞事業

世界海戰史上に輝く敵國の——港口閉塞の計畫といふものは、三つある。前項に、「將來は、唯だ空中兵力を持つてゐない國に對してのみ、直接封鎖を實施し得るだけである」——と書いたが、飛行機の發達した今日及び將來にあつては、この直接封鎖は愈其の實施を困難ならしめて來た。

——一八九八年、米西戰爭の時、その一つがアメリカ海軍に依つて企圖されたのである。即ち當時、スペイン擊隊の碇泊してゐる西領印度のサンチヤゴ港封鎖の目的を以て、アメリカ海軍サンプソン提督麾下のホブソン大尉は、白晝汽船メリマツクを指揮してサンチヤゴ閉塞を敢

行した。もう一つは――世界大戰中、一九一八年四月二十二日夜のジーブルージュ、及びオスタンド兩港の閉塞、及び同年五月十日のオスタンド港第二回閉塞の壯擧は、イギリス海軍に依つて行はれたのである。前者の目的は、擬裝の商船を港口に沈めて、港内のスペイン艦隊の出動を妨げ、陸兵上陸の掩護を全うせんとしたものであつた。又後者の目的は、ブルージュ運河を閉塞し、オスタンド港口を閉塞し、前記の兩港に大損害を與ふると同時に、ドイツ潜水艦の根據地を潰滅することであつた。そこで、この兩者の採つた手段を觀察すれば、非常に大きな差違を見出すのである。

即ちアメリカ海軍は、只一隻の商船にスペイン國旗を掲げ、敵の油斷に乘じて港口に達して自爆したのである。しかるにイギリス海軍の方は、夜間、軍艦、驅逐艦、潜水艦、飛行機等の牽制部隊を使用し、閉塞船五隻をして同時に兩港を閉塞せしめたのである。しかも、第一回オスタンド閉塞の失敗を見るや、更に前回使用した軍艦ビンヂクチープを以て第二回オスタンド閉塞を決行したのである。この兩回の閉塞に於いて、イギリス海軍は飛行機の偵察攻擊、モニターの砲擊、煤烟幕の展張、光彈の利用、砲臺の協力砲擊、軍艦の突堤破壞港内砲擊、襲擊隊破

壞隊の上陸等――あらゆる利用すべき諸要素を併合して、閉塞作戰を指導したのであるから、その行動の複雜性は云ふまでもあるまい。從つて、その作戰命令の如きも、煩鎖に過ぎる位に、懇切を極めたものであつた。かくてイギリス海軍の閉塞作業の計畫は、敵にその攻擊の奈邊に主目標を置くものであるかを、知られない中に、閉塞の目的を達せんとしたものであつた。

この兩者の中間に於いて、日本海軍の旅順口閉塞の壯擧は、三回に亘つて前後十七隻の商船を以て敢行されたのである。しかも近代的武裝を持つ旅順は、嶗嵂嘴、黃金山、蠻子營、城頭山、饅頭山等とその港を抱く丘陵に十二吋砲以下の强力な砲臺を構築し、こゝに四基の探照燈を備へて晝夜の警戒を嚴にし、港内又優勢なる艦隊が集合して居たのであるから、これを貧弱なる舊式防備の、弱少な艦隊を擁して居たサンチヤゴ港の場合と對照すれば、もとより同日の談ではない。又臨時の潜水艦隊の根據であつたジーブルージュ・オスタンド閉塞の場合とも、その趣きを異にするものであつたが、以上三つの閉塞事業が、世界の三大海軍國の各一國毎に遂行せられた事實は、奇しき因緣とも云ふべきものを感ずるのである。殊に、イギリス、アメリカ海軍を向ふに廻して戰つてゐる今日に於いては、尙更にその感が深い。

由來、閉塞作業は一大壯擧である。これを遂行するには非凡の沈勇と、又絶大の智謀を要することは言を俟たない。その計畫の周到なるは勿論、臨機の處置に於いても萬遺憾なきの用意を必要とする。日英米海軍の執つた閉塞行動に關しては、各時代の推移を反映し、その規模の大小、作業の難易等こそあれ、――日本人の剛勇、イギリス人の周到、アメリカ人の機智等、各々その特色を發揮して、永く海戰史上に光彩を放つものであらう。

他の二つの閉塞事業に比して、著しく困難を極めた旅順閉鎖に對し、日本海軍がいかに勇猛果敢であつたか、もつと詳しく筆を進めてみたいと思ふ。

前述の通り、旅順は近代的武裝を持つ難攻不落の堅壘ではあるが、唯一つの缺點は、その可航水道として一筋の狹き海口のみを有してゐる、と云ふことにあつた。わが海軍は、開戰當初より夙にこの缺點に目をつけ、敵艦隊の港内に整伏するの機を覗つてこれを港内に密封し、――北支一帶の制海權を確保して、わが陸兵輸送を安全ならしめようとしたのは、最も賢明の策であつた。若しもわが方と勢力伯仲の敵艦隊にして、隨時に北支那海に出沒され、わが後方連絡線を脅威されたならば、わが大陸作戰には大きな蹉跌を生じ、露軍を南滿より驅逐すること

は、思ひもよらなかつたのである。殊に當時向背常ならざる滿韓の地を舞臺として作戰するわが陸軍は、安全確實なる後方連絡が唯一の絶對條件であつた。のみならず、露國膺懲の師は、その海上兵力の潰滅をはかると同時に、逸早く露軍の大集中以前に、わが陸軍の作戰基地を滿韓の野に確立し、遼東半島を中斷して、個々分擊の擧に出づるの必要に迫られて居たのである。

そこで、わが陸軍は、開戰の當初から敵艦隊の分殺に努めると共に、彼等を旅順港内に追ひ込んで、一擧に港口を閉塞して――直接封鎖の實効を收め、わが陸軍の揚陸を容易ならしめんとしたのである。從つて旅順閉塞の計畫も夙に考究を積み、開戰當初既に商船四隻を以て、閉塞實行の用に當てんと準備されてゐたのである。

しかるに、二月八日の夜を期して行はれたわが第一次驅逐隊襲擊は、翌九日の晝間に至つて艦隊の總攻擊となり、敵に多大の損傷を與へて、彼等を旅順港内に遁入せしめたのであつた。

こゝに於いて、わが艦隊は、敵が未だ損傷を修復せぬ中に、旅順港口を閉塞して、わが陸軍輸送の掩護を容易ならしめんがため、――二月二十四日夜を以て、――第一回旅順閉塞の壯擧を決行したのであつた。

この時の閉塞船は天津丸、報國丸、仁川丸、武揚丸、武州丸の五隻であつて、總指揮官有馬良橘中佐の指揮の下に、閃々たる探照影裡、猛烈なる敵の砲火をくゞつて旅順港口に迫り、港口の一部を閉塞したのである。この勇敢なる行動は、わが全軍の士氣をいやが上に振興せしめたと同時に、敵をして益々その兵氣を悄沈せしめ、進んでわが艦隊を邀擊し、更に陸兵輸送への彼等の妨害を完封したものであつた。しかるに、三月二十一日のわが第五次艦隊の總攻擊に際しては、敵戰艦以下の艦艇が再び容易に港外に出てきたのである。これは、折角港口の左方に横たはつて、敵艦の出入に大いに障害を與へて居た報國丸が、いつしかその位置を動かされたからである。これより先、かゝる事をも想定して居たわが方では、第一回閉塞の結果更に第二回の決行をなすことになつて、千代丸、福井丸、彌彦丸、米山丸の四隻は、三月上旬その準備を終つて、逐次前進根據地に集合して來たのである。

かくて三月十九日、乘組員の選拔を終つたのであるが、——將校は前回の經驗を積んだ者を選び、下士官以下は新志願者を採用することゝなり、總指揮官有馬中佐の統率の下に——三月二十七日夜、第二回の閉塞を決行したのである。この時の閉塞の効果はどうであつたか。東郷聯

合艦隊司令長官の報告に曰く——、

「敵の猛烈なる砲火の下に於て、此の如く閉塞船が勇敢沈着に其の任務を遂行したるは、事業として間然する所なく、實に賞讃するに餘りあり。只遺憾なるは彌彦丸と米山丸との間に、尙ほ空隙をなし、完全に通路を閉塞するを得ざりし一事なりとす」

——とあつたが、これがため巡洋艦以上の大艦の出入には、相當の不自由を感ぜしめたのである。これはまことに、第二回閉塞の功績であつた。いかに、敵砲火が猛烈を極めたかは、かの軍歌で有名な福井丸指揮官廣瀨武夫少佐が、歸還途中赤肉一片をとめて砲彈の犧牲となつたことでも判らう。殊に、この第二回の閉塞は、第一回のそれ以來、敵は海陸共に警戒を嚴にし、又名將マカロフ提督着任後は、更に港口防備を增して、ひたすら哨戒に努めて居たのである。以つて、わが將兵の苦戰の程が偲ばれるであらう。マカロフ提督は、わが第二回の閉塞の時には、一小汽艇に乘つて港口に進み、自ら防禦砲火を指揮し、且つ麾下に向ひ、「今後日本軍にして復港口閉塞を企つる如きことあらば、發見次第敵の船舶に肉迫して、襲擊隊を闖入せしむべし」との命令を發したのである。

かくして戰局は進み、わが第一軍は朝鮮の露兵を逐ひ、まさに鴨綠江を渡つて滿洲の野に入らんとしてゐる。ウラジオ艦隊は、時々出動して金州丸以下若干のわが商船を荒掠した。第一回第二回の旅順閉塞の壯擧は、よく敵軍の膽をくじき氣を奪つて、世界の耳目を驚倒せしめたが、只惜しいことには閉塞の効果未だ完全ではなく、敵艦隊は前述の如く多少の困難を感じても、尙自由に出入してゐるのである。一方、わが第二軍は金州半島に上陸せんとして、七十餘隻の運送船は陸續大同江に集まり、四月三十日を期して、その全部の集合を終らうとしてゐる。若し旅順艦隊が出動して、わが陸兵の輸送を脅かし、その上陸を阻害するならば、わが聯合作戰はこゝに頓挫して、戰局の發展に大きな障碍を與へることとなるのである。

こゝに於いて、東鄕司令長官は、更に——第三回旅順閉塞を企圖して、海陸作戰の活動に資せんとしたのである。敵は前二回の經驗にこりて、港口の兩岸に更に低處に砲臺を增築し、港口には二重の防材を敷設し、水雷を沈置し、砲艦を港口に配置していやしくも港口に近付くものあれば、立ちどころにこれを擊破せんとする形勢であつた。

第三回の閉塞諸準備は、前二回の閉塞に從事した齋藤七五郎大尉の擔任監督に係り、閉塞船は——海軍用船より新發田丸、釜山丸、佐倉丸、小倉丸、朝顏丸、三河丸、長門丸、相模丸の八隻が、陸軍用船より遠江丸、愛國丸、江戸丸、小樽丸の四隻が撰び出され鳥海艦長林三子雄中佐が閉塞總指揮官として命を受けたのであつた。

當時は私は、赤城の航海長であつたが、閉塞船三河丸の指揮官を命ぜられ、この第三回旅順閉塞隊の一員たるの光榮に浴したのであつた。閉塞船三河丸のことに就いては、次章に詳しく述べるが——、兎も角第三回閉塞の壯擧を終つて、わが第二軍は遼東半島への上陸を完了し、こゝにわが大陸作戰の大進展を劃したのであつた。——思ふに、旅順閉塞の擧は、日本海軍の幾多の史績の中にあつても、その特殊性に於いて、他に類例を見ないものである。

旅順閉塞船三河丸

一

三つの海戰記

明治三十七年二月八日の旅順襲擊以來、わが將兵の志氣は、天に冲するの勢ひであつた。北韓の某根據地に集まつたわが幾十の艤艢の中に——日清の戰役に輝く武勳を立てた赤城があつた。當時の艦長坂本中佐は、艦橋の海圖を鮮血に染めて天晴れ忠死し、彈痕歷々と殘る當日の軍艦旗は、常に後進の血を勵ますものとなつてゐた。

——私は、この赤城の航海長として乘組んで居た。赤城の士官室は、機械室の上部に隣つて、一方は給仕室に連なり近く艦長室に面してゐる。その頃既に——閉塞船指揮官の內命を受けて居た私は、親戚知己に簡單な訣別の手紙を書かうとして、埋火をかきおこしつゝ、じつと文面を考へて居た。時は夜の〇時四十分頃——、舷測を洗ふ波の音が寒さにさえる。ふと、給仕室に人の氣勢がする。(こんなに遲くまで、起きてゐたのか)——氣になつて私は呼鈴を鳴らした。響に應じて、果して從兵が入つて來た。蛯谷虎次郎(十九歲)と云ふ、從兵中最年少の四等機關兵である。見れば眼に一ぱいの涙を浮べて、泣腫らしたらしい瞼は紅くなつて居る。

「どうしたのか、蛯谷」

「いへ、どうも致しません」

「だつて泣いて居るぢやないか。何がそんなに悲しいのだ。平常の貴樣にも似合はない」

私は、手紙を書くことよりも差當りこの可憐な從兵の涙の理由を訊きたくなつたのである。然し彼は、私の追究を怖れたかのやうに、

「航海長、何か御用ですか」

「何も別段の用はない。しかし何故今時分まで寢ないで泣いて居るのか。その譯を言へ。次第に由つては相談にも乘つてやらう」

彼は幾度も云ひ出さうとしては、躊躇した。躊躇した彼は、亦幾度も涙を拭つた。そして遂に意を決したもの丶やうに、——低いが重みのある聲で、次の事情を打開けたのであつた。

彼には、一人の兄があつた。當時陸軍一等卒で、四師團の步兵何聯隊とかに居つた。不圖した心得違ひから、出征前の一夜脫營したがため、押へられて重營倉何ケ月かの處分を受け、出征も不可能となつた。彼は幼時父に死別し、母は彼を連れて再緣したので、小學卒業後郵船會社の船員の片端しとなり、次いでその經歷から海軍機關兵を志願したのである。彼の親戚知己は、その兄の行爲を見て、蛯谷一家の恥辱なりと、事每に彼及びその母を罵倒するので、その

都度彼の心は鉛の熱湯を注がれる思ひがした。

「堪へ難い屈辱でした。私は出征以來どうかして細腕ながらも思ふ存分、御奉公の誠を盡し、蛯谷一家の名譽をも回復したいと思つてゐました。然し自分の等級が、四等機關兵であることを思へば——つい思はぬ愚痴も出で、泣かずには居られません」

私は、彼の平素の働き振り、眞型目な言語擧動を思ひ、その語るところに、一點の僞りなきを確信したのである。——彼は尙も何か言ひたげに、その希望のために煩悶して居るかのやうである。私が聲を勵まして、

「もう寢ろ、明朝がまた早いぞ」

と云つたのと、彼が、

「航海長」

と叫ぶやうに云つたのと、殆んど同時だつた。彼は、ハンカチを固く握りしめて、

「航海長、どうか私を御伴に連れて行つて下さい」

「伴とは何の伴か」

「閉塞隊の御伴です。私は貴方が指揮で御出掛になる夢を見ました。醒めても、どうも本當としか思はれなかつたのです。それから始終航海長の御樣子を看て居りましたが、旗艦に往かれたり閉塞船に立寄られたりせられるので、自分の夢は正夢で、私は疑ひもなく貴方が閉塞船の指揮官になられることを確信して居るのです。御伴とはその伴です」

私は、彼の突然の願ひに聊か驚かざるを得なかつた。——閉塞任務は秘中の秘で、勿論誰にも語らう由もない。艦內で知つて居るのは、艦長と自分ばかりである。私は、その直感力の鋭さと、思ひ込んだ熱心な態度に、烈しく心を動かされた。

「そうか。だがこれは、自分一個の考へでは即答出來ないのだ。艦長の許可を仰ぎ、司令部の意嚮を伺はなければならない。しかし、艦長の許諾を得たならば自分は悅んで貴樣を連れて行かう。」

——翌朝、彼の小指は白いガーゼに包まれて居た。彼の血書の願書は、分隊長を經て艦長に提出されたのである。

二

藤本赤城艦長は、沈痛なる面持ちで、食卓の兩側に集まつた乘組員總員を見渡した。

「本艦航海長、匝瑳大尉、辰己二等信號兵曹、中村三等機關兵曹、蛯谷四等機關兵の諸氏は、此度び閉塞船三河丸に乘組み、旅順港口閉塞の任務に就くために、今將に本艦を離れんとするのである。此の事業たる前二回の經驗に鑑みて至難の事業たるは言ふまでもない。併かも今の時に當つて亦最も必要なる戰務の一つである(中略)諸氏が今日迄本艦に盡した報公の精神は、任務こそ違へ、閉塞事業の上にも同樣であることを信ずる。又諸氏が死生の間に處して、從容其の任務を遂行する事を疑はない。余は別に臨んで最早多言を費やすの必要を認めない。只一言諸氏に對して、今日の宴に併列せられた余の心盡しの程を賤したいのである。今總員が手にせる杯代用の貝と、前に置かれた飯章魚とは兵員半日の心盡しに、折柄の汐干に狩り得た根據地の珍羹である。貝は邦音甲斐に通じ、章魚は多幸に通ず。諸氏よ、願はくば多幸にして而かも今總員が送る眞心の期待に甲斐あらしめんことを——」

艦長の聲は、或は低く或は高く、しんとした甲板上に響き渡つた。元來、赤城の如き小艦は少し多人數の一家族のやうなものである。艦長を家長と仰いで、士官が兄で下士官兵は弟である。その上下親密融和の情は、他の大艦に見るよりも遙かに濃やかである。ましてや、吳軍港を一月四日に鹿島立ちして以來、出征四閲月、生死一連をこの艦上に托して喜憂を共に誓つたこの艦、その兄弟達と別るゝ私等の胸中は、亦中々に耐へ難きものがあつた。

「あつき艦長のお情に依つて、諸氏が半日の勞を厭はず、門出に芽出度き此貝此章魚を以て、意味深長なる祖餞の情を盡されたのは、千言萬語を聞くよりも、山海の美味を頂くよりも、遙かに增して、至大の健强劑となるものであります。私等不敏なりとも諸氏が送らるゝその眞率なる誠意に酬ゆるの甲斐なかりせば、死しても還らぬ決心です。今幸に諸氏の好意になる此珍肴を頂き、充分多幸を身に收めるつもりであります。軍國の前途遼遠なれば、諸氏も何卒御健在に……」

私は、これだけ云ふのが精一ぱいであつた。(御機嫌よう)(成功を期待する)乘組員總員今は、各自徽章を帶びて洋々春の如き有樣となつた。私は、艦長に招かれて、艦長室に降りて行

つた。藤本艦長は、儼然たる態度で私の手を固く握り、一振りの日本刀を手渡されたのである。

「航海長、私は今此の刀を君に贈る。この刀は無銘だが、切味は頗る妙だ。私の眞心はこの刀に添へて、今君に手渡しする。が、決してこれを以て敵を切れとは言はない。古來武士の二本たばさんだのは人を切るためでなく、己を衞るためである。然し義に由つては、人も切り己をも刺すこともある。武士道の誠心は潛んで、三尺の劍の中にあつたのである。私が今この劍を贈るのも其精神に外ならぬ。事成つて歸還し得ざる時、事成らずして陸に馳せ向はん時、この刀は鞘を離れることもあらう。君の腕の續かん限りは……」

私は、たゞ拜謝して艦長の贈物を受けた。艦長は再び固き握手を以て、無言の涙を送られた。そして私を從へて、再び甲板上に出られた。上甲板では、和氣靄々として、悲壯の中にも一艦陶然として醉つて居たのである。

いよ〳〵最後の離杯を收めて、私等四名は萬歲の聲に送られ、かねて用意の小蒸汽に乘り移つた。わが杯の貝を懷にして。

――一聲の長笛、分袂の意を傳へ、徐々として、今赤城の舷門を離れるのである。舷上に登

つて艦員の打ち振る帽子が、段々と私等四名の目の中で、小さくなつて行つた。

三

閉塞船三河丸は、郵船會社の老朽船で、總噸數二、三二〇噸、馬力僅かに七百二十八、一八八四年の製造に係り、始めの名を――コングラチチュートと云つた英國船であつた。速力は、全力で十浬弱の鐵製の荷物船で、諸船具船體も所々腐蝕して、沈めても決して惜しくない船である。――私は、三河丸に着くと、簡單に舊船長より同船の引繼ぎ領收を終つて、再び後甲板に登つた。三河丸乘組の士官、下士官兵は、各艦より移乘してもはや全員揃つて居た。總勢十八名――その人名は左の如くである。

赤城航海長　大尉　匝瑳胤次、　明石乘組　中尉　大西良輔、扶桑分隊長　機中　豐田稔、千歲乘組　一曹　北端龜吉、　赤城乘組　二信曹　辰巳德松、　千歲乘組　二機曹　岡野米治、　赤城乘組　三機曹　中村元光、　扶桑乘組　三機曹　伊勢田榮助、　千歲乘組　一水後藤太一、　吉野乘組　一水　八百屋才吉、　吉野乘組　一水　羽原九右衞門、　千歲乘組

一機兵　鈴木多吉、　千歳乘組　一機兵　松原新太郎、　千歳乘組　一機兵　田中平八、
扶桑乘組　一機兵　鈴木幸次郎、　扶桑乘組　二機兵　奥山玉吉、　扶桑乘組　二機兵　鈴
木五郎吉、　赤城乘組　四機兵　蛯谷虎次郎

――私は、全隊員を集め改めて、披露と近付きの杯を擧げて、一場の訓示を與へたのであつた。

「死生を超脱して一意沈着、分擔の任務を遂行し、且つ不斷の攝生を以て健康を十分に保持すること」

いづれも各艦より選ばれた、決死の勇士である。今更訓示の必要もないので、私は只、船内に於ける各自の部署配置と擔當任務に就いて、注意をすればよいのであつた。

さて、十八名の隊員は、各自の部署に就いて、それ〴〵の準備に忙しく、早くもその一日は暮れた。夜になつて、閉塞各船の士官以上は、旗艦三笠の離宴に招かれたのである。

やがて、溫顏の東郷司令長官は、博恭王殿下の御先導をしながら、卓子の正面に就かれた。簡單なる告別の辭は、堅く引きしめられた口より洩れて、閉塞隊員の成功を壽(ことほ)がれたのである。

しばらくして、殿下は長官を伴はれて、士官室を去られた。私は、默々として室の一隅に佇んで居たが、島村參謀長は突然私の肩を叩いて、

「今日は御馳走もないが、任務を終つて歸つたら、その時こそ今日に倍する御馳走を以て迎へるよ」

私は、たゞ微笑して感謝の意を表したものである。宴は終つて、私は松島の小蒸汽に乘つて、朝顏丸指揮官向少佐と同乘歸船した。

「酒と情をこの身にうけて末は旅順の鬼となる」

少佐は元來の風流人で、こんな即吟を作つて、同乘の面々を笑はせた。この即吟通り、同少佐は旅順港外不歸の鬼となつたのである。

私は、三河丸に歸つて、大西、豐田の二中尉と士官室にあてたサロンで、醉後の茶を喫しながら、よもやまの雜談を試みて居た。給仕は――例の蛯谷である。

「蛯谷、もう安心だらう」

「はい」

「もう皆は寢たか」

「いゝえ、まだ誰も寢ません。皆が言つて居ました。何れ近い中に永い眠につくのだから、一晩位寢なくたつて大丈夫だなどゝ、色々快活な話の花を咲してゐました」

永い眠り——私は、はつと緊張した。

「それぢやあ、酒でも飲んで居るのか」

「いゝえ、酒は吾々の任務の終るまで、一切艦内で飲むことを廢したのです。若し酒のため爲すべき事を忘れて、取り返しの付かぬ失策をしますと、御上に對して申譯がない、と言つて先程もミルクを溫めて茶の代りに飲んでゐました」

——この精神あつて、始めて永き眠の價値を生むのである。彼等は、哲學者でも亦宗教家でもあるまい。しかもその安心立命を任務遂行の上に求めて、欣然として死生の境を超えて居る。私は、蛯谷より隊員の動靜を聞いて、言ひ知れぬ心の喜悅を覺えたのである。これ等決死の勇士を率ひて、我れ任務を行ふ、何事か成らざるものがあらうか。

いよ〳〵、決行の時も、數日の中に迫つて來た。閉塞船隊の各指揮官は、豫め敵港の現況、

探照燈の位置、照射方法、眩迷作用等を知るために、第三、第四、第五驅逐隊の諸艦に分乘して旅順港口に向ふことになつた。さて當日、私は驅逐艦春雨に乘艦して、この偵察行動に加つたのである。そして、所期の研究を果して、翌日曉方近く悠々根據地に歸つたのであつた。

四

閉塞船隊の部署は定まつた。船隊は總指揮官林中佐の引率の下に、新發田丸以下十二隻、第一、第三戰隊、第二、第三、第四、第五驅逐隊、第九、第十、第十四、第十六艇隊、赤城、鳥海に掩護せられて、五月一日午後五時根據地を出發したのである。諸運送船や軍艦の間を縫航して、港外に出ようとすると、赤城は尙ほ拔錨停止の姿で居つた。三河丸は、その側近を通航して、最後の訣別を交換した。——根據地港外に出揃ふや、閉塞船隊は一番船より十二番船に至るまで船隊番號順に、戰隊の左側一千米の間隔を以て單縱陣を作つて、豫定の航行序列に就いたのである。三河丸は四番船であつた。

——元來、軍艦のやうに常に編隊航行を必要とするものには、隊中艦位を保持するために必

要なる機關設備がある。しかるに閉塞船隊の各艦には、隊列航行に必要なる機關は、僅かにセキスタント一つである。その速力は不同で、回轉圈舵角等、一も確然たる測定を經て居ない。羅針の誤差も甚だ怪しいものである。かういふ有樣であるから、單縱陣各船間距離四百米と定まつて居ても、それを正しく永續することに、隊員一同は少からぬ苦心を要したのであつた。

次に、閉塞船の攻擊武器としては、二門の諾典(ノルデン)機關砲を裝備して居たに過ぎない。又防禦としては、麻索のマントレットの外は何もないのである。實際閉塞船には、攻擊の武器は要らない。防擊の手段は、多少施さねば港口に達するまでには、敵彈に擊沈されるか、乘員の多數は殺傷されてしまふ。そこで三河丸では、艦橋の約四分の一をマントレットに包んだ外、大概の大索は、舵銲の覆ひとなつたのである。又、船の操縱航行に必要な舵機羅針儀機關等の保護には、特に頭をいためた。次に、探照燈光の遮蔽としては、船橋の周圍に帆布の覆ひを巡らした。——各閉塞船にはその船艙に石塊を滿載し、それにセメントの流し込みがしてあつた。この外電氣自爆裝置を前後二ケ所に裝備し、咄嗟に沈沒せしむるやうになつて居たのである。

私は當時、かう覺悟を極めて居た。「人事を盡して天命をまつ可し」——かくて、大同小異の

閉塞船は、平穩なる天候に惠まれ、豫定の航行序列をつくり、旅順に向進したのである。夜——、私が乘員の部屋に入ると、皆愉快さうに談笑して居た。

「どうだ、今日は隨分疲れたらう」

「いゝえ、ちつとも疲れなんかしません。それより先刻から皆で話をして居るのですが、吾々閉塞隊のために、こんなに多數の戰隊が掩護してくれるかと思ふと、實に愉快でたまりません。死して餘榮ありと云つてゐるのです」

實に、彼等の言ふ如くに——海上見渡す限りは、大小艦艇の列に埋められ、その美しき艦尾燈の光は、靜夜の星にも似た有樣であつた。彼等はいかに、この航海を勇ましく嬉しく感じたであらう。彼等の一人が言つた。

「吾々閉塞隊の少人數で戰局の一大發展を擔ふかと思ひますと、嬉しくつて寢るのが惜しいやうな氣持がします。義士討入りの前夜の氣分もこんなだつたらうと思はれます」

彼等は、死の目的を戰局の發展におき、身を君國に捧げて喜んで死地につくものである。この赤心血誠こそ、日本海軍の勝利の基礎とも云ふべきであらう。

翌二日午後五時、圓島附近にさしかゝつた頃、波浪漸く高く明かに天候不良の兆候を示すやうになつた。——東郷司令長官は旗艦三笠より信號して、

「天候不良なるが如し、貴官の意見如何」

林總指揮官はこれに答へて、

「風は北風なれば旅順港の浪は靜穩なるべしと信ず、必ず今夜決行せんとす」

やがて——旗艦三笠の檣桁高く、鮮明なる萬國信號旗がひるがへつて、各艦これを受けつぎ

「成功を期待す」といふ信號が贈られた。各船亦「厚意を謝す」との答信を掲げて、こゝに戰隊と訣れたのである。別れ　臨んで旗艦の甲板上には、嘹喨(りょうりょう)たる樂隊の響が鳴り渡つて、悲壯の調音は、風に破れて切れ〴〵ながらも吾等の耳に達した。又各艦では登舷禮式を行ひ、總員甲板乃至リギン上に整列して、誰もが帽を振つて萬歳を三唱してゐる。吾々も亦聲を限りに艦隊の萬歳を三唱したのであつた。——旗艦三笠は、既に十六點の回頭を終り、各艦逐次回頭してもと來た途に還り行くのである。夕闇は遙かに艦隊の影を包んで、殘るは船隊掩護の赤城、鳥海、及び驅逐隊、艇隊のみである。夜は全く暮れて、邊りは漆のような闇にとざされ僅かに

微かな數點の船尾燈を認めるばかりとなつた。

吾等の任務遂行の時機も、あと數時間の後に迫つて來た。午後十一時頃、俄然北風は南東の强風となり、波濤は高い商船の舷側を超えて、飛沫は船橋に雪のように碎け散るのだつた。

五

風は益々烈しくなり、浪は次第に勢を增して來た。しかし私は依然として、豫定の進路を直進して居たのである。

三日午前一時となつた。

「指揮官、探照燈の光が見えました」

云ふ中にも、四基の紫電は閃々として空を貫いて動く。三河丸は既に、敵の探照區域内に迫つたのである。私は船の位置を測定すると、旅順港外まさに六浬半であることを知つた。そこで僚船の消息所在を確めようとし、て汽笛を吹き鳴らし、同一場所に還狀運動を繰返したが、更に應ずるものもなかつた。

三つの海戰記

そも〳〵旅順港口の可航水道は幅僅かに二百米内外に過ぎない。うまく一隻でも水道の中央に横へ得れば、敵の巡洋艦以上をしてその出動を不可能ならしめるのである。今、三河丸一隻を以て、闖入するのは難事ではないが、吾等一隻のために、敵の警戒を嚴にし、後より續く數隻の船を空しく敵彈の犧牲とすることは、編隊潛航の主旨に反するものである。私は闖入豫定時間の午前二時を過ぎること十五分まで、速力を緩めて同一の円航運動を續けて居た。折柄、俄然港口に當つて烈しい砲聲を聞き、閃光の幾團かを見た。――總指揮官の意志不達の場合にとるべき行動は、豫定の敢行である。私は、斷然單獨闖入の決意をしたのである。

私は、隊員を船橋に集めて、最後の簡單なる告別訓示を與へた。探明燈の光は白く、明かに吾等を照らして居る。各員決意の眼は凄じく鋭く輝いて居る。甲斐々々しい行裝にいづれ劣りはないが、或は日本刀を背負つた者、ピストルを帶びた者、短劍を懷にしたもの等々、それで皆麻索でズボンの裾を縛つてゐた。私は贈られた日本刀を杖ついて、船橋の中央に立つた。は總員を戰鬪部署に就けた。船の頭は立て直つた。三河丸は勇躍して旅順港口に進んだのである。

いつの間にか出た下弦の月は、暗澹たる亂雲の間に、微かな淋しい光を放つて居る。突如、船の行手に低い長い異影の動くのを發見した。まさしく一隻の水雷艇である。近寄れば、日本の水雷艇で、私と親しい平太尉の乘艇だつた。私は直ちに「閉塞船闖入の有無如何」と同艇に訊ねた。すると、水雷艇上はにわかに色めき渡つて、萬歳の聲は脚下より激しく起つた。

「閉塞船はまだ一隻も闖入しない、三河丸先登第一！」

「御機嫌よう、萬歳！」

「左様なら、御機嫌よう」

聲は、すれ違ふ船と艇との間隔に薄れて行つて、微かに遠く消え去つた。矢は既に弦を離れたのである。

しばらくして、黄金山の探照燈は眞正面から三河丸を照射して動かさない。遂には、嶗嵂嘴、饅頭山、蠻子營の三基の光を集めて、單獨なる三河丸を照らすのである。船内は白晝の如く、眼は眩んで正視することも出來ない。果然！　火焰は饅頭山上に閃いた。と同時に、各砲臺は一時に火蓋を切り、船の進むに從ひ、海岸に布列した速射機關砲までが、その乾いた音を立て

はじめた。港口に近づいて、益々飛彈の炸裂は激しく、船に中つて爆煙をあげ、或は落ちて水柱となる。その煙、その水、電光に映つて或は白く、或は赤く、凄愴の氣は、全船を包むにいたつた。私は、兩舷の機關砲員に最大仰角急射擊を命じて、當てもなく景氣をつけさした。が、忽ち敵彈のため、鈴木機兵、羽原一水兵は仆れ、兩砲全く破損して使用に堪へない。私は砲身を海中に投入させたのである。

この時から、前後左右に五、六回の布設水雷が爆發されたが、いづれも致命傷とはならなかつた。船は依然として進んで居る。突然汽罐室より「彈丸が落ちて來た」と報告して來た。幸ひそれが十五サンチの盲彈だつたから助かつたのである。私は、「今暫く蒸汽を落さないやうに」と命じながら、傳令蛯谷四機兵を呼んで、

「投錨の時機も近寄つた、メガホンを前方に向けて置け」

と命じた一刹那、左方より飛んできた彈片は、私の拇指を掠めて、折柄持つて居た呼子の笛を壓し潰して彼の咽喉に中つた。彼はあつと叫んで、その儘ばつたり仆れた。

「航海長、やられました、航海…長……あゝ——くる、しい、……航……」

聲は次第に掠れて、彼の息は絶えたのである。船は益々進んだ。可憐の勇士蛯谷の熱血おびたゞしく船橋を染めて、私の靴はともすれば滑り勝ちである。折しも血迷つた港内軍艦の探照燈は、黃金山下の崖を照らして、港口を瞭かに示してくれた。私は、この天祐に狂喜して出來るだけ深く港口に侵入し、一隻よく可航水道を塞がんものと、尙も夢中で突進した。

そして、もはや十分港口深く入つたことを確認したので、私は黃金山の崖を右手に近く、その探照燈と蠻子營の探照燈とによつて船位を測定したが、丁度水道中央の好位置であるのを認めた。一聲高く「投錨」を命じ、機關部に「全速後退」を叫んだ。これより先、後部投錨配置の八百屋一水は、下顎骨を打貫かれて居たが、その元氣一段とすさまじく、私の投錨の命を聞くや、血塗れ姿で駈けよつて、後部投錨を終り、水深を測量して、約六尋の深さである、と告げた。

私は、船首約五點の偏位を確めて、はじめて、——「總員退船用意」の號令を下した。

敵の射擊は、いよ〳〵烈しく、かねて用意の四個の大形短艇は、砲彈の犧牲となつて影も止めない。殘るは、僅かに左舷側の一小舟のみである。私は、總員を左舷側に集め、船橋の死屍を短艇に運ばし、重傷輕傷悉くその一隻の中に、乘り移らした、否むしろ詰め込んだのである。

そして、最後に、後部自爆裝置に點火したのであつた。

六

乘り移つた短艇は、僅かに危機を脱して覆沒を免がれたが、忽ち侵水して、まるで筏のやうになつてしまつた。艇は二個の彈孔を受けて居る。尙も探照燈は會釋もなくこの一小舟を照らし出して、一人殘らず鏖殺せんとして、兩岸から機關砲の急射擊、小銃の一齊射擊を浴せかける。見れば後方より艦載水雷艇らしきものが追跡してきたが、味方銃砲彈の同志擊を怖れたものか、やがて斷念して航路を外らした。行手を見れば、太い鋼索を大圓材に包んだ防材が、縱に長蛇のように流れてゐる。私はこの時始めて、防材を乘切つたことを確めた。再び哨艇に出合つたが、運良く逃れて、やがて港口も稍々後ろに遠ざかり、大小の砲彈も稀れに落下するやうになつた。

私は、艇の針路を左に執つて、黃金山麓を沿うて東斜めに沖合に漕出したのである。

私はこゝに至つて、始めて「生」といふ問題にぶつかり、生命が惜しくなつた。船の目的地に

進む時、無數の彈丸が船に集中される時、或は哨艇後を追ひ防材前を阻む時などは、生死の觀念など微塵もなく只任務遂行、乘員救出の一圖に全注意を傾けて居たのである。ところが、今漸く任務を終へ虎口を脱して、砲彈稀れに落下する樣を見て、心中の弛緩を生じたのであらう。生きたい念慮は、むら〳〵と湧いて、頭上の流彈にさへ非常な氣味惡さを感じ出したのである。

やがて朝になつた。突然艇首より「水雷艇」と叫ぶものがあつた。吾等は、あと二、三時間も收容艦艇の發見に洩れると、飢と寒氣に力盡きる場合だつたので、一同思はず波間を凝視した。互に交はす萬歲聲裡に、見れば。四十一號水雷艇である。同艇長は親しき級友水野大尉であつた。波浪の高さと、動搖の烈しさを冒し、辛じて吾等は艇上に乘り移ることが出來たのである。

「おい水野、この濤ではとても發見が困難だらう。俺達も取り逃しては大變と大いに苦心したよ」

「うん、それに豫定以上にうんと砲臺に近寄つたから、時々狙ひ擊の彈丸に見舞はれたが、よ

くも貴様は助かつたなあ」

「うん、貴様のお蔭だ。クラスメートの眞情が偶然の奇蹟を生んだのだ」

私が、こんな會話を艇長と交してゐる中にも、敵彈が艇の附近に三、四發達した。艇は漸く沖合に向針して、閉塞隊員收容艦を搜し求めた。遙かに、吾等掩護の鳥海を發見し、艇は直ちにそれへ進んで、隊員收容の信號を行つた。しかし結局、鳥海は小艦の悲しさ艦の動搖甚しく、折角卸ろしかゝつた救助艇も卸すことが出來ず、水雷艇はその收容を斷念して更に沖へと進んだのである。

しばらくして、沖合遙かに大艦の勇姿を認めた。艦は淺間艦であつた。忽ち救助艇は卸ろされ、級友清河大尉その艇長となつて、吾等を淺間艦上の人とならしめたのである。

私は、艦橋の八代艦長に迎へられ、一般の報告を終つて、海圖上に最後の測定方位を記入して、好位置の沈沒であつたことを悅んだ。見れば、鹽垂れたその服、くちゃ〳〵のその帽、見すぼらしさの限りを盡したその容姿に、自分乍ら哀れを催すばかりであつたが、尙ほこの時まで、私の手には寸時も離さなかつた、赤城艦長恩授の日本刀があつた。

思へば、三河丸ほど多幸の船はなかつた。その根據地を發してより自爆沈沒に至るまで、何等船內の故障を起したこともなく、亦港口闖入に當つても幾多砲彈の雨を冒し水雷の網を潛り防材を乘り切つても、亦何等の致命傷を受けることもなく、悠々として所期の地點に達して、思ふがまゝに自爆沈沒することが出來たのは、眞に天祐であつた。しかも總員悉く、水雷艇に助けられたのも、眞に不思議なやうな心地がする。この不可思議の因由は一體何か。唯、赤城艦長祖餞の章魚がこの身に附添つて居て呉れたのであらうと思ふ。

昭和十八年一月十五日印刷
昭和十八年一月二十日發行
（初版五〇〇〇部）

出文協承認
[illegible]329號

著者
檢印

海戰の科學

定價壹圓八拾錢

著者　匝瑳胤次

發行者　田中啓作
東京市麴町區有樂町一ノ十三
（讀賣新聞社別館内）

印刷者　長田忠次郎
東京市京橋區入舟町三ノ七

印刷所　長田印刷所
東京市京橋區入舟町三ノ七

發行所　啓德社出版部
東京市麴町區有樂町一ノ十三
（讀賣新聞社別館内）
振替東京四九八四二番
文協會員番號一〇九〇二一

配給元　東京市神田區淡路町二ノ九
日本出版配給株式會社

382
189

啓德社刊